



平成 30 年度 静岡大学地域連携応援プロジェクト 成果報告書



国立大学法人静岡大学
地域創造教育センター
Education Center for Regional Development

目 次

◆巻頭言 静岡大学地域連携応援プロジェクトについて	2
丹沢 哲郎 静岡大学理事（教育・附属学校園担当）／副学長／地域創造教育センター長	

平成 30 年度静岡大学地域連携応援プロジェクト 成果報告

1. 音楽と朗読による地域遺産の継承	3
『滝口入道』を聴く～高山樗牛入門～ @観富山龍華寺 企画について 〈代表者〉小二田 誠二 人文社会科学部 教授	
2. グローバル化する静岡～子どもたちと実践する国際交流学习～	7
〈代表者〉池田 恵子 教育学部 教授	
3. 子どものレジリエンス（精神的回復力）を育てる教材作成および実践	11
〈代表者〉小林 朋子 教育学部 教授	
4. 静岡県内の情報系 NPO 法人・静岡県中部県民生活センターと連携した 「高齢者のネット被害防止」プロジェクト	15
〈代表者〉塩田 真吾 教育学部 准教授	
5. 小児科外来における治療・療養環境改善プロジェクト ～安心・想像・つながり・笑顔が生まれるコトづくり～	18
〈代表者〉高橋 智子 教育学部 准教授	
6. お茶のまち静岡市に新たな風を！ ～若い世代が提案する課題解決策の実現化へ向けた取り組み～	22
〈代表者〉竹下 温子 教育学部 准教授	
7. 大学と地域が共に伊豆の自然環境を楽しむプロジェクト	26
〈代表者〉徳岡 徹 理学部 准教授	
8. 浜松市と大学との連携事業～大学生による講座～	28
Kids Science Café 〈申請代表者・顧問〉立岡 浩一 工学部 教授	
9. 浜松市北区三ヶ日町における観光活性化のためのワークショップ事業	31
〈代表者〉杉山 岳弘 情報学部 教授	
10. 小学生へのプログラミング教育支援事業	35
〈代表者〉田中 宏和 情報学部 教授	
11. 絵本読み聞かせ会による地域活性化と絵本の可能性発見プロジェクト	37
〈代表者〉田村 敏広 情報学部 准教授	
12. 地域住民及び大学関係者に向けた防災・減災啓発活動	39
〈代表者〉岩田 孝仁 地域創造学環・防災総合センター 教授	
13. 消費者教育でつなぐ伊豆半島ジオパーク SDGs 推進プロジェクト	42
〈代表者〉山本 隆太 教職センター 特任准教授	
14. 旧マッケンジー住宅の顕彰事業	44
〈代表者〉井原 麗奈 地域創造学環 准教授	

巻 頭 言

静岡大学地域連携応援プロジェクトについて

丹沢 哲郎 | 静岡大学理事（教育・附属学校園担当）／副学長／地域創造教育センター長

今年6月、静岡大学は創立70周年を迎えます。本学は、『自由啓発・未来創成』という理念を掲げ、教育・研究・社会連携の三つを主要な使命としてきました。なかでも社会連携に関しては、「地域社会と学生・教職員が相互に啓発しあう関係を構築するとともに、地域との協働による課題解決を通して、地域社会の価値の創造と持続的な発展に貢献」という目標を掲げています。大学改革の3類型についても、地域のニーズに応える人材育成・研究を推進する方向を選択し、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の中で、他大学、自治体、企業と連携して県内就職率の向上、新たな産業の創出、そして地域活性化に取り組んでいます。

このような地域連携ならびに地域と共創する教育の重要性に鑑み、平成29年10月に、地域創造学環とイノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門とを統合する形にて、「地域創造教育センター」を設置し、大学と地域を結ぶ窓口としての立ち位置を明確にしました。学内において、このような地域連携活動の窓口となる組織を設置する前から、すでに本学の学生・教職員はさまざまな地域連携活動に携わっていましたが、それらの活動は必ずしも学内外の皆様には周知されておらず、また活動に際して様々な困難を抱えていたのが実情です。そこで、平成23年度に地域連携生涯学習部門の前身である地域連携協働センターが、「地域連携応援プロジェクト」を企画し、「本学の学生・教職員が主体となり、地域の人々や団体、自治体等と協働で取り組んでいる又は新たに取組もうとする地域活性化につながる活動」への支援を学内で公募、採択しました。その後も継続して公募を行い、8年目を迎えた今年度は、学内各部署から21件の応募があり、14件を採択しました。各プロジェクトチームは、学外の方々と連携しながら着実な活動を展開し、有益な成果を得ており、その成果は学内外から高い評価を受けております。

また、平成25年度には本プロジェクトを手がかりに、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。第1期・第2期合わせて42課題について、学内外の支援を得ながら新たな地域連携・貢献活動を展開中です。

本書は、平成30年度の地域連携応援プロジェクトの成果をまとめたものです。本学には学生・教職員の携わる多様な地域連携活動があることを知っていただき、今後それらの活動に参加したり、あるいは新たな地域連携活動を始めたりするきっかけとして活用いただければ幸いです。



平成30年度に実施した成果報告会のポスター

年度	応募	採択	学内他部に付託（依頼先）	予算措置
H23	17件	7件	4件（防災総合センター）	100万円
H24	18件	11件	3件（学生支援センター）	150万円
H25	14件	12件	0件	180万円
H26	16件	13件	0件	180万円
H27	16件	11件	0件	105万円
H28	25件	15件	0件	129万円
H29	19件	13件	0件	109万円
H30	21件	14件	0件	175万円

音楽と朗読による地域遺産の継承 『滝口入道』を聴く～高山樗牛入門～ @観富山龍華寺 企画について

小二田 誠二 | 人文社会科学部教授
連携先：観富山龍華寺

1. 事業の背景・目標

大学の地域連携、ということから想像されるのは、製品開発や環境、防災に関わる学術的な知見の提供、開発協力といったものが想像しやすい。一方、いわゆる「文系」では、賑わい創成、地域おこし・活性化、といった、当面する課題を解決し、未来に繋げる形が多いように感じている。一方で、過去に目を向ける「郷土研究」は、考古学や日本史などで盛んに行われており、一部では観光資源としての利活用も進んでいる。とはいえ、上記のような未来への視点と十分に結びついているようには見えない。これには、双方を繋げる仕掛けの弱さがあるように感じている。更に言えば、地域の歴史的な資源を、観光的な、外来者を呼び込むためのコンテンツとしての「利用価値」で判断すること自体に疑問もある。

代表者である小二田は、静岡大学人文社会科学部言語文化学科に所属し、日本言語文化分野担当の教員として、様々な形で静岡の歴史や文化の掘り起こし・研究・紹介を行ってきた。現在、成果物として静岡大学附属図書館に収蔵されているものだけでも、十返舎一九、興行、印刷文化史、郷土史家、二丁町遊郭、小島龍津寺所蔵須弥山儀、静岡ハリストス正教会のアイコン、鍔絵師森田鶴堂、富士時計とフジ・オルゴール、茶、富士山、旧制静岡高等学校などがあり、各地の生涯学習センター等での講演、あるいは授業では、ほかに、小坂、模型産業史、駿府と家康、印刷文化史、但沼舎人親王祭典、後藤肅堂、小島と恋川春町、由井正雪、三保・清見潟をめぐる文学・景観、徳川文庫・葵文庫など、多岐にわたる題材を扱っている。

これらを一括りにして、「地域に残る歴史文化遺産」と呼ぶとして、大学を含む公的な機関から依頼を受けて扱ったのは、富士山、茶、一九、徳川、模型と言った、既にそれなりに知名度の高い材料ばかりである。それらは「静岡と言えば、……」という意味で発信力の高いコンテンツとして、更に磨きをかけ、「利活用」していく意味があるのは確かだが、一方で、静岡の人でもよく知らないもののなかに、文化史的には非常に注

目すべき物が多く存在する。これらは、必ずしもすぐに観光資源として「利活用」出来るわけではなく、当事者でさえその文化史的な文脈を認識していないことが多い。したがって、まず為すべきことは、関係者、その土地の人たちに意義を認識して頂き、それを継承していく手立てを確立することである。

こうした歴史文化遺産は、偶然の発見や、知人からの紹介などによって知ることとなり、必要に応じて、ふさわしい方法で調査・研究・報告を行うことになる。このような活動を続けることで、地域の交流の中で、ゆかりの伝説や人物について、広く知らせる活動を手伝って欲しいという要望を頂くようにもなる。こうして、材料は増える一方で、それらを扱いきれないと言う問題も発生する。

また、こうしたやり方では、殆どの場合、イベントを開催し、成果物を作れば終了、ということになるし、催しの来場者も高齢者が多くを占めると言うことも問題になる。イベント開催や記録の保存は、アーカイブとしての意味はあるにしても、実際に「活用」という視点で言えば、冒頭で述べたように、次の世代に引き継いで行くための工夫がさらに必要だろう。

この事業は、このような現状認識に基づき、地域に残る歴史文化遺産を、若い人達に伝え、次の世代に継承して行くと言うことを目的とする。

2. 事業の概要

上記目標の実現の手段として、演劇や音楽に関わる人達の協力を仰ぎつつ、学生たちによる朗読や演奏を行うのが、本事業である。それは、一過性のイベントではなく、それに伴う準備や企画運営・記録を含む過程において、世代を超えた地域交流と、学びあえる仕掛けをつくる方に重点がある。それぞれの場所で、そこに暮らす人達に向けたイベントを行い、成果を受け渡していく中で、「ものがたり」や「うた」という形で伝承を形成していく仕組みの構築をめざす取り組みである。

このような取り組みで、既に成果の出ている先行例としては、静岡県立大学の細川ゼミ「焼津&八雲 YY

プロジェクト」、鈴木ゼミ「羽衣つたえ隊」を挙げることができる。これらの活動は、学生たちを主体として、朗読や演劇、グッズ開発、絵本制作など、多岐にわたっており、対象も、幅広い年齢層、さらに外国人と、広い。また、本学の地域創造学環等でも、フィールドワーク先との深い関わりの中で時間を掛けて大きな成果を目指す事業が展開されている。これらの先行例を参考にしつつ、本事業では、一つの課題をじっくり深めるより、点在する資源を次々に掘り起こし、活用できる形で残し、伝えていくと言う手法を取る。

具体的には、地域に残る文化遺産に関わる話を掘り起こし、テキストを作り、学生たちが、ゆかりの場所で朗読会・演奏会を開催する。その過程で、地域で朗読・演奏活動をしている俳優、音楽家たちの協力を仰ぐ、と言うようなことを、1箇所にとどまらず、数多く展開していく。

こうした活動によって、これまでは歴史講座などに参加していなかった若い人達にも親しみやすく「ものがたり」や「うた」を伝えることが出来、これによって、これまで歴史講座などに参加していた地域の高齢者層と学生、子供を含む若年層との交流も期待できる。また、それぞれ、所縁の寺などで開催することによって、地域共同体の核としての寺社・教会等の存在意義を再認識し、交流の場として、一層の活用を促したい。

朗読指導は、SPACの俳優であり、地域で歴史朗読活動を行っている奥野晃士氏、歌唱指導は、近年CD「静岡県郷土唱歌」を発表した丸山研二郎氏に依頼。彼らの朗読・演奏も行う。材料としては、さしあたり、前節で紹介したような物を想定している。

3. 今年度の事業

さて、このような展望を持ちつつ、既に協力依頼や講座開催例が複数あり、「歌」も含め、準備を進めている課題もあるが、今年度は、前々から話のあった清水区の観富山龍華寺で「滝口入道」に関する朗読会＋講座を行うことにした。

この企画は、観富山という号の通り、古来の富士山展望地であり天然記念物の蘇鉄やサボテンも有名な観光スポットでもある龍華寺にある高山樗牛の墓碑、及び、関連資料を、多くの人たちに知らせ、親しみを持って理解して頂きたい、というお寺側からの要望を頂いていたことから始まっている。



朗読会＋講座チラシ

龍華寺においては、すでに、2013年に、静岡大学の公開講座として「清水の風光と近代宗教家たち」を開催し、ここでも高山樗牛が取り上げられ、大変な好評を得ている。

現在では殆ど知られることの無い高山樗牛は、明治中期には若き文豪として知られていた。そして、樗牛唯一の小説作品である『滝口入道』は、特に戦前、多くの人に影響を与えている。しかし、擬古文で書かれているため、現代人には、とても読みづらい文章になってしまい、読まれないまま、よく解らないけど悲恋物語らしい、程度の情報が流通する、残念な状態になっている。

この、読まれざる古典の魅力は、現代語訳して読んだり、内容を解説することでは十分伝わらず、音読することで初めて理解できる要素が大きいという、この事業にふさわしい材料と言える。

今回は、言語文化学科が主催する多言語朗読会の、日本語チームを牽引してくれた言語文化学科の学生たち（石川風花・横田高実・呉文成・THAI THIEN HAO）をプロジェクトメンバーとして、作品の朗読に挑んだ。朗読の指導をお願いした奥野晃士氏は、SPACの俳優であり、静岡で「歴史演談」と言う、寺院を中心に、県内各地で朗読と講釈の会を継続して行っており、本事業にも賛同してくださり、集中的なご指導を頂いた。もともと朗読を得意とする学生たちであり、事前に高い水準の準備ができていたが、専門家の指導による、朗読の質の劇的な変化には目をみはるものがあつた。



学生への指導の様子

また、打合せの中で、檀家さんたちの参加が見込まれることが予想され、樗牛についても「滝口入道」そのものについても入門的な解説が必要、と言う話が出たため、実際に来場者が少ない場合でも、事後にお寺で活用できるような配布資料を作ることにして、その分は小二田が作成した。

4. 龍華寺と高山樗牛、そして「滝口入道」

さて、ここで、事業報告としては不要かも知れない情報であるが、今回の企画の材料である龍華寺、樗牛、「滝口入道」について、簡単に解説しておく。

高山樗牛は明治 4（1871）年、現在の山形県鶴岡市山王町に出生。第二高等中学校を経て、帝国大学文学部哲学科を明治 29 年卒業、第二高等学校教授となったが、翌年辞職し、博文館に入社、雑誌『太陽』編集主幹に就任。文部省留学生として欧州留学が決定したが、肺結核の悪化で辞退、明治 35 年 12 月 24 日、現在の神奈川県平塚市で死去。32 歳。明治 27 年、大学 1 年生で応募した『滝口入道』が『読売新聞』の懸賞に入選、非常な話題になった。ただし、完成・刊行された小説は『滝口入道』一作のみで、彼の名声は文明批評や「心友」姉崎正治との往復書簡などによるところが大きい。しかし、これらも、現在では、時代に流された結果とみられて、あまり高く評価されているとは言い難く、忘れられた文豪の一人となっている。

明治 22 年の東海道線開通後、興津（清見潟）が別荘地・療養地として多くの文人たちも足を運ぶ場所となり、樗牛もその一人だったが、療養の間に三保などを訪問するうち、随一の富士山景勝地である龍華寺を墓所にして欲しいと言う手紙を実父に送っており、これに従って現在同寺に墓碑が存在する。

このように、現在富士山世界遺産関係で、三保が突出して紹介されているが、特に明治期には興津を中心

に貴顕、文化人の訪問が多く、宗教を含む文化的な拠点として、清水港を取り巻く清見潟を一体として再評価する必要があるし、その場合、清見寺と共に、龍華寺は大きな意味を持っている。

樗牛唯一の完成、公開された小説作品である『滝口入道』は、『読売新聞』の時代小説・脚本公募に応じた作品で、一等無しの二等賞になり、紙上に 33 回にわたって連載された。内容は、『平家物語』の平維盛八島脱出から入水までの経緯を、維盛の親の代からの家臣で、先に出家していた齋藤滝口時頼を主人公として描き直したもので、一般的な『平家物語』本文より『源平盛衰記』や『横笛草子』を下敷きに、さらに『源氏物語』を含む多くの古典を利用して再構成した歴史小説である。

本作は、美文調の擬古文で書かれている。それが、現在の小説とは大きく異なる要素であり、小説好きでも手を出しにくくしている。試しに「青空文庫」から一節を引用しておく。

西八條殿の揺ぐ計りの喝采を跡にして、維盛・重景の退り出でし後に一個の少女こそ顯はれたれ。是ぞ此夜の舞の納めと聞えければ、人々眸を凝らして之を見れば、年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打ち重ね、丈にも餘る緑の黒髪後にゆりかけたる様は、舞子白拍子の媚態あるには似で、閑雅かに臆長て見えにける。一曲舞ひ納む春鶯囀、細きは珊瑚を碎く一雨の曲、風に靡けるさゝがにの絲軽く、太きは瀧津瀬の鳴り渡る千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響き重し。綾羅の袂ゆたかに飄るは花に休める女蝶の翼か、蓮歩の節急なるは蜻蛉の水に點ずるに似たり。折らば落ちん萩の露、拾はば消えん玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其の姿。見る人果然として酔へるが如く、布衣に立烏帽子せる若殿原は、あはれ何處の誰が女子ぞ、花薫り月霞お宵の手枕に、君が夢路に入らん人こそ世にも果報なる人なれなど、袖褰引合ひてののしり合へるぞ笑止なる。

この文章を現代語訳して読めば、勿論文意は伝わるが、このような表現をした意味は全く伝わらない。また、内容も、現代から見れば典型的な男性文学であり、悲恋物語と言うよりは、今となっては古くさい武士道小説というのが妥当な評価であろう。しかし、解説しながら朗読することで、話の展開や表現の工夫が伝わることで、そうした過剰とも思える装飾表現が、音読に適し、物語をゆたかにしていることが理解できる。

また、今では高く評価されなくなった文明批評的な発言や思索、書翰も、同時代的には非常に高い評価を得、論壇人としても影響力を持ったと言う事実についても、2014 年には、樗牛に関する古典的な研究や発言を網羅した『高山樗牛研究資料集成』（全 9 巻）が出版されるなど、日本の近代のあり方ともに見直す機運が生まれている。こうした観点からも、故郷山形や終焉の地平塚だけでなく、清水でも樗牛及びその著作の体系的な研究、位置づけを行っていく大きな意義がある。

5. 事業成果

今年は御住職が日蓮宗の百箇日荒行で、冬の間不在だったため、調整が難しく、日程が遅くなり、2 月 22 日（金）の開催となった。平日の昼間ということもあり、動員には苦勞し、結局 20 名ほどの来場者で、内訳も、檀家さん、市民開放授業受講者が中心で、結果として、課題として認識していたとおりの高齢者中心になってしまったが、地域で文化活動をしている知人や、静岡大の教員の姿もあり、終了後貴重な御意見を伺うことも出来た。また、学生は当初 4 名で動き始めたが、集中講義や病気のため、2 名のみの参加となった。

講座の内容は、最初に住職の挨拶、ついで小二田による趣旨説明と、樗牛・『滝口入道』に関する簡単な説明。そして、学生による朗読。全 33 回分の小説のうち、第 1 回分、第 2 回分を段落ごとに切って読み、それぞれに解説を加える。その後、あらすじの説明をして休憩。後半は最後、第 32 回分を同じように読んで解説したあと、第 33 回は一気に読んでもらった。



当日の様子

特にアンケートなどは採らなかったが、休憩時間、及び終了後に、来場者にお話を伺うことが出来た。朗読が素晴らしかった、難しい文章だが内容に引き込まれたという声が多く、指導された奥野氏も、練習の成果が出て、今までで一番のパフォーマンスだったと高く評価して下さった。また、住職も、最後は涙が出た

と。実際に朗読を担当した学生たちも手応えを感じていた様子であった。残念ながら、解説についての評価は耳にすることがなかったが、企画そのものについては非常に高い評価を得た。

朗読会企画はプロが演じた方が素晴らしい講座になるのは明白だが、こうして、技術や考え方を伝授し、更に地域の人たちが参加出来る形で伝えていくことの意義は、十分に共有出来たものと考えている。

実際、学生たちと、奥野さん、私とで行った「特訓」では、役者としての身体感覚や表現方法の問題と、文学研究の側からの作品へのアプローチとが混ざり合い、相互作用によって学生たちの表現が変化していく体験をすることが出来た。非公開で行ったのが申し訳ないような、楽しく、豊かな時間を共有でき、今後は、こうした練習も、ワークショップのような形で公開する企画の可能性も探ってみようと言う話になっている。

また、企画そのものの記録は、古くからこうした企画の記録をお願いしている「歴工工房」、三浦悟氏のご協力を仰いだ。この映像は、編集されて DVD として発行される。非売品であるが、静岡大学附属図書館、龍華寺など、関連する場所に保管し、閲覧に供する予定である。

6. 今後に向けて

上に述べた目標や概要とは矛盾するようだが、龍華寺側としては、今後、同じような企画の継続を望んでおり、また、実際『滝口入道』という作品そのものの魅力を再認識できたこともあり、可能な方法を模索したい。それとは別に、冒頭で触れたように、今後は、他の材料への取り組みも加速して行く予定である。実際、次年度に向けて、動き出している企画もあるが、予算その他、今後が見通せない。長期的な視野で、継続してこそ企画なので、財源を含め、安定した態勢作りが一番の課題である。

■本プロジェクト参加メンバー

小二田 誠二 人文社会科学部教授

(プロジェクト代表者)

石川 風花 人文社会科学部言語文化学科 2 年

横田 高実 人文社会科学部言語文化学科 2 年

呉 文成 人文社会科学部言語文化学科 2 年

THAI THIEN HAO 人文社会科学部言語文化学科 2 年

グローバル化する静岡 ～子どもたちと実践する国際交流学習～

池田 恵子 | 教育学部教授

連携先：静岡大学教育学部附属静岡小学校、エスコラ・アレグリア・デ・サベール浜松校

1. プロジェクトの背景と目的

静岡県は全国で8番目に多くの外国人が居住している。その数は、法務省によると85,998人（平成29年12月現在）に上り、海外にルーツをもつ市民、外国籍児童や外国人学校が多い。また、主力産業である製造業や、農林水産物は海外との取引がますます増加し、海外にルーツをもつ子ども、地元の子どもの双方にグローバル化への対応ニーズが高い。

国際交流学習は子どもたちが諸外国の文化を理解し、偏見や先入観を持たないことの良さを実感できる絶好の機会であり、場・時間・課題を共有することで、より交流相手を身近に感じ、交流テーマである課題を自分事としてとらえることができる学習活動である。しかし、学校現場における国際交流学習は学習の具体的な方針や育まれるべき能力が明確ではなく、広く実践されているとは言いがたい。ただ楽しく珍しい活動をしておしまいということも多い。また、交流の調整や授業の準備が教師の負担となることも事実である。

本プロジェクトの目標は、県内の小学校と外国人学校の子どもたちが行う国際交流学習の企画・実施・評価を大学生・教員チームが支援することを通して、国際交流学習の経験が少ない学校教員でも実践したいと思えるような気張らない国際交流学習を提案するためのモデルを作成し、国際交流学習によって学習者が育む能力や態度を整理することである。

2. プロジェクトの計画（2018～19年）

月	日（時刻）	EAS	静小
10	15（9:30-10:15）		授業見学・検討会
11	5（13:00-15:00）	授業見学	
	12（13:40-14:25）	第一回授業	
	19（13:40-14:25）	第二回授業	
	22（12:55-13:40）		第一回授業
	26（13:50-14:35）		第二回授業
	30（11:30-13:50）	第三回授業（合同授業）	
12	4（13:50-14:35）	第四回授業（Skype）	
1	31（16:05-17:35）	報告会	

3. プロジェクトの概要

本プロジェクトは浜松のブラジル人学校エスコラ・アレグリア・デ・サベール浜松校（以下、EAS）と静岡大学教育学部附属静岡小学校（以下、静小）の高学年の子どもたちの交流活動を事業参加学生が支援した。事業参加学生は、授業を行う際には、EASと静小を担当するチームに分かれて活動した。

(1) 国際交流実践授業の目標

「今後他の国の人に会った時、自分から進んで交流したいと思えるようになる」、「偏見にとらわれないことの良さを実感する」である。

(2) 国際交流実践授業の内容

第一回授業

目標「偏見を持つことに気付く」

「偏見の意味を理解する」

実施日 EAS：11月12日、静小：11月22日

第一回授業では、主に静岡県内にある外国文化に関係のある写真を使いフォトランゲージを行ったり、静岡県にどれだけ外国人が住んでいるのかなどのクイズを行ったりした。異なる文化として無関係にとらえるのではなく、身近に存在し、共通している点があることを子どもたちに気付いてもらうための活動を行った。



第二回授業

目標「互に関心を持つ」

「交流会が楽しみになる、疑問を持つ」

実施日 EAS：11月19日、静小：11月26日

第二回授業では互いの学校生活の写真を見ながら、共通点や相違点、気になることを探した。それによって互いの学校生活やどんな子がいるのだろうかという興味や関心を持つような活動を行い、子どもたちの交流会に対する期待や不安を聞いた。また交流会で使用する名札づくりを行った。

第三回授業（交流会）

目標「偏見にとらわれない良さを実感する」

「バックグラウンドを忘れて交流する」

実施日 11 月 30 日



第三回授業では静小で交流会を行った。第二回授業で作成した名札を手掛かりに、ビンゴカードを埋める自己紹介ビンゴゲームでアイスブレイキングをし、EAS と静小の混合グループでマシュマロチャレンジを行った。マシュマロチャレンジは、乾燥パスタとテープを用いてタワーを作りどれだけ高い位置にマシュマロを乗せることができるか競うゲームである。交流会で緊張がほぐれたのちに、昼食と昼休みの自由時間を一緒に過ごした。

第四回授業

目標「偏見にとらわれない考え方を持つ」

実施日 12 月 4 日

第四回授業では、交流会を振り返る活動を模造紙と付箋を用いて行った。そして相手がどんな不安を抱えていたのか考えた。その上で授業の最後にスカイプによる質問タイムを設け二回目の交流を行った。

4. 子どものあらわれ

全四回の授業を通してみられた子どもたちのあらわれとして、次の二点があげられる。一点目は相手に対する気持ちの変化、二点目は相手のイメージの変化である。

相手に対する気持ちの変化は、第二回授業後と第三回授業後の感想との比較から見る事ができる。第二回授業後の感想には、子どもたちの交流に対する期待や

不安を書いてもらったが、次のような不安を抱いている子どもが多くいた。EAS では、「偏見の目で見られないかどうか不安。」「歓迎してくれるか不安。」といったものがあり、静小では、「ちゃんと話せるか不安」というものがあった。EAS と静小では異なる面についての不安であるが、両校の子どもたちに共通して交流に対する不安という気持ちが見られた。しかし、第三回授業後の静小の子ども感想では、「最初は緊張して距離が遠かったけど弁当と一緒に食べたり鬼ごっこをしたりして仲を深め合って距離が近くなった。」や、「一緒になって同じことをやると自然に遊べるんだなと思った。」といったことがあげられ、EAS の子ども感想では、「日本人と交流ができて一緒に遊べてよかった。」といったことがあげられた。交流前に子どもたちの中にあった不安な気持ちが交流に対して前向きな気持ちへと変わったことがわかった。子どもたちの気持ちに影響を与えたものは、第三回授業で行ったマシュマロチャレンジや、授業後のお昼ごはんと一緒に自由時間を一緒に過ごしたことでありと考えられる。マシュマロチャレンジでは、同じ目標に向かって協力して活動を行う姿があり、自由時間には言葉が伝わらなくとも積極的に関わろうとする様子や一緒に楽しそうに遊ぶ様子があり、これらが子どもたちの距離を縮めたといえるだろう。

二つ目のイメージの変化は第四回の授業からみられる。第四回授業では、交流の前後において相手に対する印象や気持ちがどのように変化したのかを考える活動をし、子どもたちは相手も交流に対しての不安を感じていたことも知った。第四回授業後、EAS の子ども感想には、「偏見の目で見られると思っていたが、そういった目で見られることなく仲良くできたからよかった。」ということがあり、静小の子ども感想には、「最初は体が大きくてちょっと怖いイメージがあったけど、11 月 30 日と 12 月 4 日の交流でとても優しくて面白い子だと思った。」ということや、「私たちでさえ怖いと思っていることが、ブラジル人の子たちは国が違うからそういう意味で怖かったりしていたと思う。だから日本人と話すのが怖くないと言ってくれたとき本当にうれしかった。」といった内容があり、相手のイメージが変わったことがわかった。また、振り返ることで相手の立場や気持ちについて考える事ができた。

以上のように交流の前に持っていたネガティブな気持ちは交流によってポジティブなものに変わり、相手のイメージが実際にかかわることで変化した経験をもと

にした印象を抱くようになった。そして活動を振り返ることによって、相手の立場、気持ちについても考えることができた。直接的な交流が子どもたちに影響を与えているといえるだろう。



この授業を通して、継続的な交流の必要性を感じた。先述したように、交流をすることで子どもたちの相手に対する考え方は変化する。それと共に、継続的な交流は子どもたちの距離を縮める。第四回授業の後には、「前のときより緊張せず話せた。」「もう一度話せてよかった。」というような声もあり、子どもたちはとてもうれしそうにしていた。一度きりの交流ではなく、何度も回を重ねることで、交流に対しての緊張感や抵抗感が和らぐため、相手の事をより知ることができ、仲良くなれる。共に過ごす時間を多く設けることで子どもたちがお互いを理解することや積極的なかわりにつながっていくだろう。「また会いたい。」という子どもたちも多くいて、こういった子どもたちの思いを大事にしていくべきである。

5. ディスカッション

以上のような成果も見られた実践であったが、学生の反省点として「偏見」についての共通認識が不明瞭で、どのようなものとして子どもたちに理解してほしいかということを曖昧なままにできてしまったということが挙げられる。しかしながら、実際の教育現場で「偏見」や「国際理解」といったことを取り上げるにあたり、このことは重要であり、議論すべき内容であると考えた。そのため、この実践の報告会において、静小、EASの先生方と教育学部の学生と共に、ディスカッションを行った。

テーマは、偏見そのものに関することと、国際交流学習の実践における偏見の扱い方の二点である。

(1) 偏見についてのディスカッション

先に述べたように、偏見をしないことが良いことだと気づかせるための本授業を作成するにあたり、まず、「偏見」のビジョンが不明瞭であるという問題に直面

した。「偏見」を扱う授業をするためには、「偏見」について教員側がよく考え理解することが必要である。そこで、ディスカッションの前半では、「偏見はどうして起こるのか。」ということについて話し合ってもらった。

以下、参加した学生、協力して下さった両学校の先生方の意見である。

- ひとりの人として接するのではなく、「その国の人」というステレオタイプのイメージで接してしまうことにより起こるのではないか。
- 遺伝的に「未知」を怖がっているだけではないか。
- 過去の経験から偏見が存在しているのか、知識不足から偏見が存在しているのか。

また、「知らない」ことの不可抗力さの議論から発展し、「偏見を持つことは、仕方のないことだ」という意見も出た。その中では「継続的に自分の考えを更新できる性格であることに、その対応は託される」など、偏見する原因の解消というよりも、その後の対応を重視する意見も出た。また今回の授業では、その橋渡しができたのではないかと、という評価をいただいた。



(2) 国際交流学習についてのディスカッション

全4回の授業を通して、国際交流学習は今後学校教育現場で推進されていくべきものだと強く感じた。そして、国際交流学習を行うにあたって偏見の扱いについて熟考する必要があると考えた。教師が生徒にどこまで、どのように伝えるべきなのかは、国際交流学習を行うにあたって十分に配慮しなければならない。そこで、ディスカッションの後半では、「偏見を国際交流学習においてどのように扱っていけばよいのか」について、協力いただいた両校の先生方から意見をいただいた。ここでの国際交流学習は、異なる文化を持つ

者同士が直接的もしくは手紙やスカイプなど、何かしらの形で間接的に関わりをもつ活動だと定義づけている。

まず交流を行う前段階として、「相手のことを深く知り、考える」ことが大切であるという意見が得られた。交流を行う相手が置かれている状況や気持ちを考え、相手に寄り添う姿勢を持つべきだということだ。また相手のことを知ることについては、表面的な知識だけでなく、その状況になるに至った経緯や背景も知る必要がある。これらの知識を生徒に教えるときは正しい情報を伝えるように留意しなければならない。このような準備をした後で、交流を通して生徒自身が違う点だけでなく共通点を見つけたり、相手に抱いていたマイナスイメージは実は思い込みで、実際には違ったといった経験だったりができるとういという意見も得られた。交流を行うなかで、偏見をなくすことのメリットを生徒自身に実感してもらいたいということだ。また、国際交流学習は異なる文化を持つ者同士が交流するため、交流に対する不安を抱くことが考えられる。その場合は自分が所属している安心できるコミュニティで不安を解消しながら徐々に歩み寄っていくことが望ましいと考えた。

このような国際交流学習を通して、文化の多様性に気づくなど良い経験を積み重ねていくことが、生徒に偏見にとらわれない考え方を養う一歩となると考えた。そしてそのような経験を積み重ねていくためには、国際交流学習を複数回にわたって継続して行うことが必要である。長い目でみて国際交流学習を進めていくことで、生徒の意識を徐々に変化させたり視野を広げたりできると望ましいと考えた。

■本プロジェクト参加メンバー

池田 恵子 教育学部教授（プロジェクト代表者）

ヤマモト・ルシア・エミコ 教育学部准教授

【学生チーム】

上野山 なつき 教育学部生涯教育課程 4 年

（学生チーム・リーダー）

佐橋 香名子 教育学部生涯教育課程 4 年

和田 華波 教育学部生涯教育課程 4 年

田端 なつ実 教育学部発達教育専攻 4 年

佐野 朱音 人文社会科学部言語文化学科 3 年

吉村 彩乃 人文社会科学部社会学科 3 年

【エスコラ・アレグリア・デ・サベール】

7 年生の生徒たち

ジュベート・ギマラス教諭

【静岡大学教育学部附属静岡小学校】

6 年 3 組の児童たち

杉本 傳教諭



本事業の成果を共有するパンフレット（日英版、日ポルトガル語版）を作成

3

子どものレジリエンス（精神的回復力）を育てる教材作成および実践

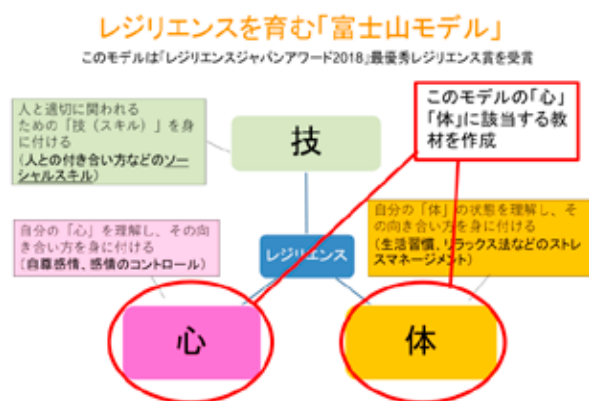
小林 朋子 | 教育学部教授

連携先：静岡県内小中学校および高校

ストレスフルな出来事を経験したり、困難な状況にさらされていても精神的健康や適応行動を維持する、あるいはネガティブな心理状態に陥ったり心的外傷を受けたりしても回復する能力や心理的特性であるレジリエンス（精神的回復力）が注目されるようになってきている。日々の生活の中で子どもたちがこのレジリエンスを高めるためのコミュニケーションスキルやストレスへの対処方法を理解し、身につける機会を提供する必要がある。本実践では本学の学生と共に最新の研究成果を基に教材を作成し、小中学生、高校生を対象とした授業実践を行い、困難に出会ってもしなやかに対処できる人材育成を目的として行った。

1. 教材作成

教材では学生たちの着想で「レジりん」というキャラクターが用いられた。まず、教育学部の教育心理学・教育学専攻の学生・大学院生がレジリエンスに関する日本及び海外の文献を学んだ。そしてレジリエンスを育む富士山モデルのうち「心」と「体」に関する内容で教材を作成することにした。



学生たちがアイデアを出し合い、子どものレジリエンスを研究するプロジェクト代表者と議論し、適宜アドバイスしながら教材作成を進めていった。

教材では紙芝居形式で、子どもたちが日常生活で経験するトラブルを場面として用いて、学んだことを日常生活で活用してもらうことを狙った。レジリエンスを高めていくための方法を考えていく内容で、5シリーズ作成した。イラストは美術教育専攻の学生が作

成し、多様な学生の力を活かして作成を行った。



紙芝居の主役の「レジりん」
いつも子どもたちから「かわいい!」と歓声があがる

「物事のとらえ方編」では、「きつこうだ」と思いこむのではなく、起こった出来事を、様々な角度から捉えることを学び、その後、ワークで練習した。





「とらえ方と感情編」では、起こったことのとらえ方によって、感情やその後の行動が違ってくことを学んだ。



2. 実践の様子

今年度は、小中学校および高校で、延べ 25 回の授業実践を行うことができた。授業のテーマは子どもの実態に応じて学校と相談の上、決めていった。



ゆるキャラのレジリンの紙芝居では、子どもたちが集中して聞いていた。また授業によっては、学生たちも入り担任教師と一緒に説明したりすることも行った。



レジリンを例にして解説をした後、子どもたちに実際にやらしてもらったワークを取り入れた。例えば、「とらえ方と感情編」のワークでは、「友だちと LINE でやりとりをしていたら既読がついているのに返事がこえてきませんでした」という例をあげて、「その時のとらえ方、感情、行動を考えて、ワークシートに書いてみよう。いろいろなパターンを考えてみよう」と子どもたちに考えてもらった。

実際のワークであげられた子どもたちの発言は以下のようなであった（一部のみ）。





子どもたちの普段の様子も垣間見るような発言も多くあげられた。子どもたちにとって日常生活で友だちがどのように考え行動しているかを知る機会にもなり、「え〜！」や「なるほどね！」などのつぶやきと共に自分の出来事へのとらえ方や行動について見つめることができたと考えられる。

3. 参加した子どもたちの感想

「とらえ方と感情編」の授業を受けた参加した小中学生の感想を紹介する。

「ケンカした時に文句を言う前に、少し考えてみたいと思いました。だれかにむかつくことを言われても、相手はいいことを言っているかもしれないから、一度考える（小5女子）」

「怒りにまかせて何かをすることをやめようと思った（小6男子）」

「おこられることがあったら他の角度から考えて、とらえ方を変えていきたいです。とらえ方を変えるだけで感情や行動が変わることをはじめて知りました。（小6男子）」

「私は悪いくせで自分の思ったことをすぐに行動にうつしてしまう。今回、「他の考え方」をしてみることが大切だと分かり、少し「実行してみよう！」という気持ちになることができた。相手にだって思いや都合の良いとき、悪いときがあるのだから、すぐに決めつけず、他の考え方をしてみることで心の成長、相手との関係がより良い方向に延びていくようにしたい（中1女子）」

「出来事の捉え方を変えてみれば、自分の気持ちが変わりそれが行動として表れてくるので、相手の気持ちもよくなると思います。だからたくさんの考え方ができるようになるといいです。そうしたら普段抱えているストレスも減り、もっと笑顔で楽しく生活できる

ようになっていくと思うので気を付けたいです。意識一つで変わるから今日学んだことを大切にしたいです（中2女子）」

こうした感想が多数あげられ、子どもたちが教材を通して、日常生活で起こる出来事をどのように捉えるとよいかを学ぶことができた。

4. 参加した保護者の感想

本教材を用いた授業実践の中で、学校が保護者にも参加して子どもたちと一緒に学んでもらう機会を設けたいという要望があげられ、保護者も参観できるようにした。「とらえ方と感情編」の授業を参観した保護者の感想を紹介する。

「レジリエンスという言葉は初めて聞きましたが、とても大切なことだと思いました。子どもはもちろん大人にとっても。ネガティブな考えで頭が凝り固まってしまう時も他の考え方ができるようになるといろいろな気づきが生まれ、周囲の雰囲気も良くなると思います。子どもたちが積極的に発言している姿が頼もしかったです。」

「とらえ方によって感情が変わっていき、その後の行動も変化していくことを知りました。感情で怒ることを減らし、子育てに役立てたいです。」

「レジリエンスを高めることの大切さを学ぶことができました。子どもをはじめ家族の中で話をするとき、いろいろな捉え方で考えられるように心がけたいと思います。また子どもたちにもいろいろな捉え方ができるように対応していきたいと思います。」

「子どもの話をよく聞いて状況を把握し、一緒に捉え方を考え、感情を落ち着かせられるようにサポートしていけたらよいなと思いました。」

「とらえ方により考え方や行動が変わる。その時の感情で行動しないよう、いろいろな角度から考えてみるように、横からそっと言ってみようと思いました。親の様子を子どもは見ているので、自分も気を付けようと思いました。ネガティブよりポジティブに変えるようがんばります。」

このように授業に参観した保護者からも好評を頂くことができた。子育てにも役に立つという感想も多くあげられたことから、次年度はさらに参観する保護者が増えていよう学校と連携して取り組んでいきたいと考えている。

5. 学校内での活用

学校では、授業後にレジリエンスの教材で学んだポイントなどを掲示物にして、日常的に子どもたちが思い出せる工夫をしてくれている。先生方や子ども同士の日常会話の中で、「レジりんで学んだ○○だね」という言葉が聞かれるようになってきている、という報告があげられてきている。



6. 地域における広がり

実践した学校の中で、A 高校でのレジリエンス教育の実践は 4 年目となり、本教材を用いた授業を含め、毎年 4 回の授業を行っている。その結果、生徒の中には中学校時代に不登校を経験したことがある等、人間関係をはじめとする様々な支援を必要としている生徒がいるものの、高校進学後はその多くが改善に向かい、穏やかな学校生活を送っている。また 4 年間継続し、成果もあがってきたこともあり、今年度は静岡県東部地区の近隣高校、さらに地元の伊東市内小中学校から先生方が授業見学に来るようになり、今年度は 4 回の



伊豆新聞 平成 30 年 9 月 6 日朝刊掲載

授業で延べ約 50 名の見学があった。毎年、見学する先生が増えている。また新聞にもとりあげられるなど地域における関心が高まってきている。

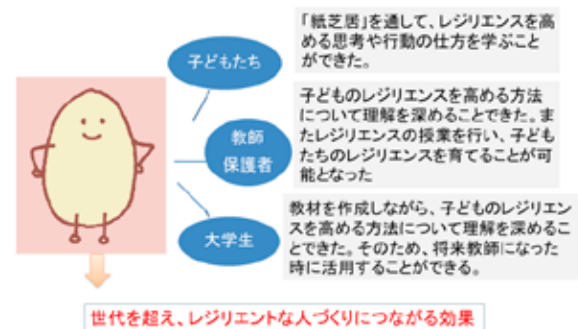


静岡新聞 平成 30 年 9 月 20 日朝刊掲載

7. まとめ

本実践の成果を以下のようにまとめた。

レジリエントな人を育てる「教材」の波及効果



毎年、学校現場からの問い合わせや授業依頼が増え、次年度以降も、引き続き静岡県内の小学校、中学校、高校に活動の場を広げていく予定である。

本教材における実践は、2019 年 3 月に一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会の「ジャパン・レジリエンス・アワード（強靱化大賞）2019」にて「教育機関部門」の金賞を受賞した。

■本プロジェクト参加メンバー

小林 朋子	教育学部教授（プロジェクト代表者）
高橋 花歩	教育学部教育心理学専修 4 年
田端 なつ実	教育学部教育心理学専修 4 年
瀧 彩乃	教育学部教育心理学専修 3 年
権田 晴大	教育学部教育心理学専修 3 年

4

静岡県内の情報系 NPO 法人・静岡県中部県民生活センターと連携した「高齢者のネット被害防止」プロジェクト

塩田 真吾 | 教育学部准教授

連携先：NPO 法人イーランチ、静岡県中部県民生活センター

1. 高齢者のネット利用の現状と課題

総務省の通信利用動向調査（2018）によると、インターネット利用率は 80.9% であり、年齢階層別の利用率を見ると、20～29 歳が 98.7% と最も高く、世代が上がるにつれて利用率は低くなっていく。しかし、60～69 歳の利用率は 73.9% であり、高齢者のインターネット利用率は決して低くないことがわかる。若者に限らず高齢者もインターネットも利用する時代となってきた。インターネット利用機器の状況を見ると、2016 年まではパソコンがスマートフォンを上回っていたが、2017 年にはスマートフォンが 59.7%、パソコンが 52.5% となり、スマートフォンがパソコンを上回る結果となった。しかし、年齢階層別に見ると、60 歳以上は未だパソコンの利用がスマートフォンを上回っており、年齢によってインターネット利用機器が異なることがわかる。

一方、インターネットを利用することへの不安もある。通信利用動向調査（2018）によると、インターネット利用時における不安について「不安を感じる」、「どちらかといえば不安を感じる」と答えた人が約 7 割で、年齢階層別に見ると、若者層よりも高齢者層の方が不安を感じている割合も高い。

不安を感じる背景には、インターネット利用に伴うトラブルが考えられる。具体的には、アダルトサイトや電子メール、インターネット取引、オンラインゲームの利用に伴うトラブルなどが発生している。国民生活センターによると、PIO-NET（全国消費生活情報ネットワークシステム）には消費者の様々な相談が寄せられるが、2017 年度の「インターネット・電話・通販関連」の相談の中で最も多かった「インターネット通販」に関わる相談件数だけでも 233,624 件にも及んだ。また、消費者庁によると、高齢者のトラブルは他の世代に比べて未だ少ないものの、アダルト情報サイトや出会い系サイト等の「デジタルコンテンツ」に関する相談では高齢者の割合が増加している。こうした高齢者のネット被害を防止するための取り組みは急務であろう。

2. 高齢者向け教材の開発

こうした背景から、本プロジェクトでは、高齢者のネット被害防止のための教材を開発し、その成果を考察することとした。

教材の開発にあたって、まずは扱うコンテンツの整理を行った。現在、問題となっているトラブル事例を明らかにするため、消費者庁、総務省、内閣府、国民生活センター、警察庁、警視庁、東京都青少年・治安対策本部のホームページから、注意喚起されている内容を整理した。整理した内容を表 1 に示す。

表 1 関係省庁機関が挙げているトラブル事例

	消費	総務	内閣	国生	警察	警視	治安
架空請求	—	—	○	○	○	○	○
ショッピング・オークション	○	○	○	○	○	○	○
オンラインゲーム	○	○	—	○	○	—	○
なりすまし 誹謗中傷	—	○	○	—	○	○	○
迷惑・チェーンメール	—	—	○	○	○	○	○
詐欺・悪質商法	○	—	—	○	○	○	—
不正アクセス 不正アプリ	—	○	—	—	○	○	○
誘い出し	—	○	○	—	—	—	○
料金全般	○	○	—	○	○	○	○
Wi-fi 接続	—	○	—	—	—	—	—

これらの整理した内容をもとに、高齢者の被害状況も踏まえて、今回の教材で扱う内容を表 2 のように整理した。

表 2 高齢者向け教材の内容

	内容
架空請求	ポップアップのクリックによる架空請求
ショッピング・オークション	ショッピングサイトでの個人情報の入力
オンラインゲーム 料金全般	オンラインゲームでの個人情報の入力
なりすまし 迷惑メール 誘い出し	友達を装った URL 付迷惑メッセージの受信
詐欺・悪質商法	ショッピングサイトでの詐欺
不正アクセス 不正アプリ	不正な無料アプリのインストール

これらの内容について、単に「こんなことに気をつけましょう」と、知識として高齢者に伝えるのではなく、「あやしいを見きわめよう」という形で、あやしい部分を高齢者自身が判断できるように教材を開発した。また、高齢者が利用しているシーンがわかるような内容を表面に、裏面にPCやスマートフォンの画面を提示して、どこがあやしいかを判断できるようにデザイン化した。

図1に開発したカード教材の一部を、図2に教材のスライドの一部を示す。



図1 開発したカード型教材



図2 開発した教材のスライド

なお、教材の開発にあたっては、株式会社カスペルスキー、NPO 法人イーランチ、静岡県中部県民生活センターの協力を得た。

3. 講座の実施と成果

開発した教材を用いて、高齢者向けの講座を実施した。講座は、静岡県くらし交通安全課、NPO サポート・しみずが実施する「防犯まちづくり講座」の中で実施した。参加者は、40代から70代までの28名である。講座の全体の様子を図3に示す。



図3 講座の様子

講座では、開発したカード教材を用いて、実際にあやしさを判断する活動を行った。参加者は、まずは個人であやしさを判断した後（図4）、グループで議論しながら（図5）、あやしさについて検討を行った。

参加者の中で、スマートフォンを所持している人は21名、所持していない人は7であった。また、スマートフォンの所持に関わらず、普段ネットをよく利用する人は21名、利用していない人は7名であった。



図4 個人であやしさを検討する様子



図5 グループであやしさを検討する様子

講座の成果についてアンケートと感想から分析を行った。

まず、アンケートでは、カード教材を使った講義について、①取り組みやすさ、②わかりやすさ、③初め

て知ったこと、④今後の役に立つかの4観点について4件法で回答を求めた。

全体の平均と年代別の平均を図6に示す。回答数は、全体が28名、40代が5名、50代が4名、60代が10名、70代が9名である。

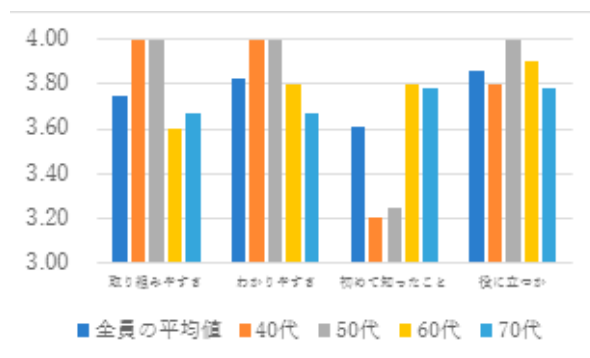


図6 全体の平均と年代別の平均の比較

結果を見ると、①取り組みやすさ、②わかりやすさについては、40代・50代＞60代・70代なのに対して、③初めて知ったことについては、40代・50代＜60代・70代となり、④今後の役にたつかどうかについては、年代ごとの差は少なく、全体の平均が3.86と非常に高い数字であった。カードワークそのものや用語の理解については、40代や50代の方が適していたものの、全年齢が「役に立つ」という回答であったことから、本教材及び講義が、高齢者だけでなく、中高年に対しても有効であったと言える。

また、図7にスマートフォンの所持及びネットの利用による違いを示す。

所持している人、よく使う人の方が、③初めて知ったことに対する値が低いですが、それでも④今後の役にたつかどうかについては、持っている人(3.90)、持っていない人(3.71)、よく使う人(3.86)、あまり使わない人(3.86)と、高い値であったことから、本教材及び講義が、所持の有無・利用の違いに関わらず有効であったと言える。

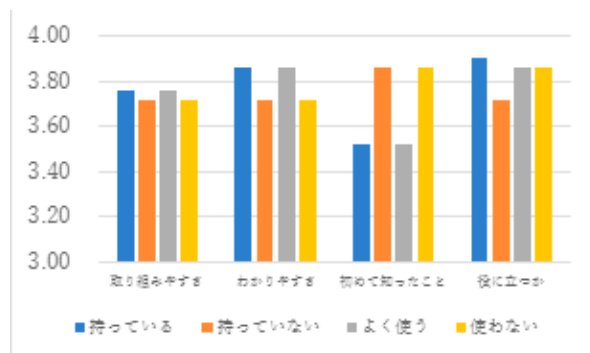


図7 所持の有無・利用の違いによる比較

また、感想では、次のようなものが挙げられた。

知りたいことがよく分かり、友達にも伝えられそうでした。

ただ「気を付けなさい」と言ってもだめで、どう気を付けるのか考えることが大切だという事がとてもよく分かりました。

今回、単に「こんなことに気をつけましょう」と、知識として高齢者に伝えるのではなく、「あやしいを見きわめよう」という形で、あやしい部分を高齢者自身が判断できるようにした点が、評価されたと言える。

今後は、今回の教材を用いて、静岡県中部県民生活センターの消費生活相談員や県内のNPO法人などと連携しながら、県内各地で講座を実施するなど、高齢者のネット被害の防止に向けての活動を続けていきたい。

■本プロジェクト参加メンバー

塩田 真吾 教育学部 准教授(プロジェクト代表者)

高瀬 和也 大学院教育学研究科1年

栗林 星来 教育学部発達教育学専攻3年

小児科外来における治療・療養環境改善プロジェクト ～安心・想像・つながり・笑顔が生まれるコトづくり～

高橋 智子 | 教育学部准教授
連携先：静岡赤十字病院

1. 活動の経緯

近年、小児科の外来や病棟では、子どもの不安や痛みなどを軽減するための治療・療養環境の改善に関する取り組みが各地で報告されている。静岡赤十字病院においても、数年前に実施された全面的な改築に伴い「暗い」「怖い」「圧迫感がある」「不安」等のイメージを払拭し、来院者（子どもや付添の方々等）が利用しやすい小児科外来の環境改善が求められてきた。

2016 年度に本プロジェクトで採用いただいた「静岡赤十字病院小児科外来における壁面制作プロジェクト」では、治療・療養環境の改善及び整備を目指して、小児科外来待合室の壁面制作に取り組んだ。その結果、環境改善が図られた一方で、「もの（壁面）」の制作にとどまらず、「もの（壁面）」を活用した「こと（活動）」の提案を行い、より充実した治療・療養環境の改善に取り組むことが課題としてあげられた。そこで、2017 年度には同プロジェクトで継続採用いただき「小児科外来におけるコミュニケーションアートカードの制作」に取り組んだ。壁面の制作という空間づくりのみならず、空間を利用した「こと（活動）」（ゲーム性のある設置型と配布型のアートカード 4 種類）の提案を行った。これらのカードは、昨年度末に静岡赤十字病院のスタッフへプレゼンを行い、概ね好印象であった。ただし、昨年度はアートカードの制作のみに留まったため、小児外来における運用については今後の課題となっていた。

2. 活動の目的及び内容

本活動の目的は、「子どもや保護者が安心して治療を受けることのできる病院の治療・療養環境の改善及び整備」を目指すことである。本年度の目的は、これまで制作してきた壁面とアートカードを活用した「安心・想像・つながり・笑顔が生まれるコトづくり」に取り組み、市民が利用しやすい病院の治療・療養環境の更なる改善に取り組むことである。

具体的な活動内容として、①壁面とアートカードを活用したワークショップ（以下、ワークショップとする）の開催、②ワークショップ後のアートカードの改

善・修正及び運用方法の検討、③成果のアウトプットに関する検討（リーフレット及び動画の制作）、④アートカード（設置型）の追加制作を計画した。

①では、ワークショップと合わせて、これまで着手していなかった小児科外来のトイレ内の壁画も新たに描くこととした。本報告書では、ワークショップ及び関連して取り組んだトイレの壁画制作について、報告する。

3. 活動組織

活動組織は、静岡赤十字病院小児科の医師と看護師、保育士と大学教員（高橋：責任者）、静岡大学教育学部美術教育専修及び美術・デザイン専攻の学生有志、教育学研究科 学校教育研究専攻 美術教育専修学生有志となっている。本年度は、昨年度まで活動に参加してきた学生の継続参加や新たな学生の参加があった。大学院生や学部生が共に協力し、ワークショップの実施や壁画の企画及び制作等に取り組んだ。昨年同様、参加した学生の専門領域も様々（美術科教育、デザイン、絵画、彫刻）であり、お互いに問題を共有しながら案を出し合い、ワークショップの実施や壁画の企画及び制作等に取り組んだ。

4. 活動計画

(1) 壁画とアートカードを活用したワークショップ

先述したように、昨年度は壁画と関連づけたアートカードの制作のみに留まり、実際の運用に向けて実践を行えなかった。そのため、本年度は静岡赤十字病院で 7 月に開催された「しずおか日赤まつり」に合わせて、ワークショップを実施した。本まつりは、病院が地域住民との交流を目的として、病院を開放して実施しているものであり、当日は病院内で様々なイベントを行っている。まつりには、多くの地域住民が参加するため、アートカードの実践を行うには良い機会だと判断し、病院の許可をいただき、ワークショップを実施することとなった。日時や場所などは、以下の通りである。

●日時：平成 30 年 7 月 21 日（土）

- 場所：静岡赤十字病院 小児外来
- 時間：10：00 ～ 14：00
- 内容：設置型（シルエットカードと間違い探しカード）の実施と配布型カード（オーナメント）の配布

ワークショップは、子どもから大人を対象とし、これまで作成した設置型と配布型のカードを試してみることとした。事前に、カードを並べ、遊び方を説明した資料も作成した。

参加者には、シルエットカード又は間違い探しカードに参加してもらい、その後、配付用のオーナメントカードを選んで持ち帰ってもらった。ワークショップ後には、参加した大学側のスタッフにアンケートを実施し、カードや運用に関する評価を行った。

間違い探しカードでは、親子でコミュニケーションをとりながら一緒に取り組んでいる姿が多く見られた。子どもから大人までが楽しめ、今回の実践で最も親子のコミュニケーションが多かった。使用した間違

い探しカードは難易度を高く設定していたため、間違いを見つけた時の達成感があり、見つけた時に嬉しそうにしている子どもの姿が見られた。また、一人で全ての間違いを見つけることが難しかったため、自然と家族や友人、スタッフと協力をして取り組む姿が多く見られた。病院の待合室という環境を考えた場合、間違い探しゲームのように椅子に座ったままでも取り組めるカードの性質が良かったという声もあがった。課題と今後の可能性としては、難易度が難しすぎるという声もあり、見つけづらい部分はヒントをつくる等の工夫が必要ではないかという意見や間違いを見つけた箇所が分かりやすいようにマークができるようにする等の工夫が必要ではないか等の意見がでた。

シルエットカードでは、壁面に描かれているモチーフ（動物など）とカードのシルエットを見比べて探すため、待合室の中を動き回り、体感的な遊びになっていた。壁面を活用したカードゲームという点が特徴的であると評価する意見もあった。カードは3つのレベルを設定していたため、幅広い年齢層の参加者が自分に合ったレベルを選択し楽しんでいた。カードに書かれたヒントを手がかりに、待合室を活発に歩き回り探している子どもの姿や、親子での声を掛け合う姿もみられ、互いに楽しんでいる場面もみられた。ただ、間違い探しカードに比べ、親子で取り組むというよりも子どもとスタッフで取り組む姿や子どもが一人で探そうとする姿が多く見られた。課題としては、取り組ん



当日のワークショップの様子



カードに取り組んでいる参加者の様子

でいる最中は待合室を動き回ることになり場が混乱する点や、椅子に座った範囲で取り組めるような安全への配慮が必要な点などあげられた。また、可能性としては、壁画の「ストーリー性のある絵」を生かして、シルエットカードのページが進むたびに、物語が進んでいくようなカードのつくり方の工夫等、新たなアイデアもでた。

参加者からは、治療等に不安を感じている子どもの気持ちを和らげるために良い方法であるや、設置型の両カードともに短時間で行え、子どもの年齢に合わせた難易度も選べた点が評価された。また、スタッフからは取り組む際の負担を軽減できるような遊び方のガイドや保管方法の検討も課題としてあがった。今後の運用については、上記に示したように、改善点や新たなアイデアを踏まえていきたい。

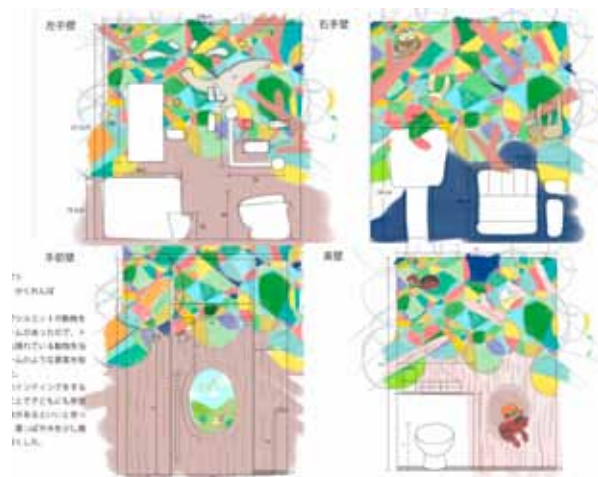
また、配布型カードのオーナメントの配布については、間違い探しカードやシルエットカードで遊んだり探したりしたキャラクターに愛着を持ち、多くの種類の中から選ぶ楽しさを参加者が感じていた。

(2) 小児科外来のトイレ壁画制作

アートカードのワークショップ実施と並行して、外来にあるトイレの壁画制作にも取り組んだ。待合室の壁画は既に完成していたが、外来に設置されているトイレは、未着手のままであった。外来のトイレは、ベビーカー等でも入れるように内部が広がっているが、暗い雰囲気であったため、本年度、トイレの壁画制作に取り組むこととなった。制作のコンセプトは前回同様であるが、前回との違いは、既に外来の壁画が描かれていることであった。そのため、外来の壁画に合わせたデザイン（色・形・モチーフ等）が求められた。

今回、壁画制作を担当した大学生（4名）は、前回の壁画制作に参加していなかったため、これまでの活動目的や大切にしているコンセプトキーワードの共有等を行うことから始めた。現場視察も行い、病院スタッフの話を聞いたり、外来の雰囲気を自ら感じたりすることで、思いやイメージを広げていった。その後、壁画のアイデアを繰り返し検討し、壁画デザインを決定後、制作に取り組んだ。壁画アイデアについては、コンセプトに沿った原案を個人で提案した後、グループで個人案をベースに新たな案を練っていった。検討を重ねる中で、外の壁画とのバランスを考え、自然と動物をモチーフとしてグループ案1を提案した。案1は全体的に暗い雰囲気がするというので、全体を明るくデザインし直した案2を再提案し、本デザインで制作を

行うこととなった。ワークショップ当日には、公開制作を行い、制作している様子を参加者に見てもらう機会を設け、本活動に対する理解を促した。ワークショップに参加した親子と壁画制作の大学生が交流する場面も見られ、制作者である大学生としても、利用する人たちの反応を感じながら制作に取り組む事ができた。



壁画の個人案（一部）



壁画のグループ案1



壁画のグループ案2（最終案）



ワークショップ当日の公開制作の様子1



ワークショップ当日の公開制作の様子2

ワークショップでの公開制作では、様々な方に制作過程をみていただき、声をかけていただいた。以下のような意見もいただいた。

息子の予防接種を受けに毎月通院しています。待合室は子ども達の泣き声が響き、息子は他の子につられて順番を待つ間からグズグズと落ち着きません。そんな中でも、オムツ替えのために利用するトイレは親子二人になれる貴重な空間で、可愛い動物のイラストのおかげで気分転換を図れています。鏡を覗くと親子で森の中にいるような錯覚も楽しめ、とても優しい気持ちになります。子ども達を大切にしてくれている想いが伝わり、病院のイメージが良くなったと感じています。

病院スタッフからも、待合室同様にトイレの雰囲気がとても明るくなり、楽しい雰囲気になったという感想が多く聞かれた。今までは何も描かれていない白い壁だったが、壁画が描かれてからは絵を見ている子どもが増えているという評価もいただいた。壁画制作やカードの提案を通して、子どもが楽しさを感じ不安な気持ちが少しでも軽減できればと両提案に対する期待の声を聴くこともできた。本活動では、「もの（壁面）」の制作にとどまらず、「もの（壁面）」を活用した「こと（活動）」の提案を行い、より充実した治療・療養環境の改善に取り組むことができた。アートカードの運用については、2月から3月にかけて、課題を再度検討し最終調整を行っていく。また、成果をアウトプットするためのリーフレット及び動画の制作③やアートカード（設置型）の追加制作④にも現在取り組んでいる。これらの取り組みを通して、利用者が安心して治療を受けることのできる病院の治療・療養環境の改善及び整備を今後も目指していく。



完成したトイレの壁画

謝辞

本プロジェクトにおいて、関わっていただいた静岡赤十字病院の関係者の皆様に感謝いたします。

■プロジェクト参加メンバー

高橋 智子 教育学部准教授（プロジェクト代表者）

【大学院生及び学部生】

石川 千尋 大学院教育学研究科美術教育専修2年

齋藤 沙都 大学院教育学研究科美術教育専修2年

牧野 純奈 教育学部美術教育専修4年

古田 茉穂 教育学部美術教育専修4年

漆畑 ゆず 教育学部美術・デザイン専攻4年

小園 理紗 教育学部美術・デザイン専攻4年

齋藤 麗愛 教育学部美術・デザイン専攻4年

中根 隆弥 教育学部美術・デザイン専攻4年

吉本 優奈 教育学部美術・デザイン専攻4年

吉田 萌 教育学部美術教育専修2年

【静岡赤十字病院】

西澤 和倫 静岡赤十字病院 医局 小児科部長

吉角 由紀 静岡赤十字病院 看護部所属 看護師

望月 亜紀子 静岡赤十字病院 保育士

お茶のまち静岡市に新たな風を！ ～若い世代が提案する課題解決策の実現化へ向けた取り組み～

竹下 温子 | 教育学部准教授

連携先：静岡市農業政策課、静岡菓子組合



1. プロジェクトの背景および目的

静岡は日本一のお茶どころであるが、近年、労働者の高齢化による労働力の低下や茶価の低迷から、茶業の衰退が問題視されている（図1:A）。静岡市では先人たちが築き上げてきたお茶の伝統・文化・産業を守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て、次世代に引き継ぐため、平成20年に「めざせ 茶どころ日本一条例」を発令し、様々なイベントを手掛けている（図1）。しかしながら、若い世代への普及はなかなか進まず、若者の斬新なアイデアを事業に生かしたいという要望があった。



A. 静岡県茶価の低迷



B. 茶キリ娘



B. 茶摘み体験



B. お茶学校

図1. 静岡の茶価の現状（A）と静岡市の取り組み（B）

そこで我々は、昨年度、後期に静岡大学の学際の中で「静岡市の茶を知り・触れ・考える」という科目を立て、「COC+」更に「学部横断型」を取り入れた授業を展開した。授業内容は、静岡市の茶産業の現状について、フィールドワークや茶産業関係者との討論を経て、課題を抽出し、共通の課題を持った学生がグループを組み解決策を多方向から提案するものとした（図2）。最終的に若者視点の6つの提案について（表1）、静岡市のホールにて100名近くの一般市民、茶産業関係者に向けて発表を行った（図3）。



図2. 「静岡市の茶を知り・触れ・考える」授業内容

表1 市民ホール発表の提案内容

タイトル	発表内容
お茶を用いた コンビスウィーツの開発 View tea	味、見た目、価値など若者視点を検証した上での新商品の開発提案 茶景観の維持と活用について
海外へのお茶の発信	海外への静岡茶の発信、まずは見た目から？
お茶飲まなくちゃ！ 静岡緑茶で乾杯 ～茶価値の回復～	若者向けカフェの提案 お茶の価値の再認識について
繋げよう、広げよう！ 未来へ続くお茶の架け橋	行政・民間企業の協力による茶業振興への支援と情報発信



静岡新聞
平成30年2月17日
朝刊掲載

図3. 授業における学生の提案発表例

最終的に6つの課題に絞り、改善策を提案したが、課題抽出の段階にて、学生が共通して挙げた静岡市の茶産業の課題は、「情報発信の不足」であった。

そこで本プロジェクトでは、授業の一環として提案された6つの提案を凝縮した若者・海外旅行者向けの「お茶情報発信冊子」を作成することとし、更に提案の中から若者カフェや新商品開発への実現化を目指し、手を挙げてくれた4名の学生と静岡市お茶のまち推進評議会と共に取り組むこととした。

2. パンフレット作成の取り組み

まず、昨年の学際科目の授業で抽出された提案を振り返り、若者向けパンフレットを作成するために、どのような視点で何を評価していくのか話し合った（図4）。パンフレットの目的は、若者への「お茶」の普及であり、若者視点の情報発信を行うことで、若者がお茶に、より興味関心を持つことを目的としている。さらに、2019年ラグビーのワールドカップ及び2020年の東京オリンピックで増加するだろう外国人旅行者の利用も視野に入れている。その内容は静岡市街の茶カフェの検証、日本の象徴である富士山とお茶畑が望めるドライブスポット（茶景観）、さらに静岡のお土産ランキングなど、様々な分野に若者の視点で踏み込んでいくものである。

評価については、若者は商品を選ぶ際に、見た目の「かわいさ（パッケージ、インスタ映え）」や「コスパ（価格）」で選ぶことが多いということから、まず商品の評価として、①パッケージの魅力（インスタ映え）、②価格、③味、④静岡らしさ、について5段階評価で検討していくこととした。またカフェの検証については、①店の雰囲気、②味、③価格、④静岡らしさ、⑤インスタ映え、⑥過ごしやすさ、⑤利用目的などを評価することとした。



図 4. 評価決めの話合いの様子

a. お土産、テイクアウト商品の評価

お茶に関するお土産やテイクアウト商品を購入し、商品の評価を行った。お土産は日持ちがよく、学生が心惹かれる商品を購入してもらい、評価はプロジェクト構成以外の教育学部の学生にも参加してもらい、数回に分けて行った。お土産は18種類、テイクアウト飲料および商品は11種類を検討した（図5. 一部検討商品掲載）。その結果、美味しいと思う商品とインスタ映えする商品に若干の違いが生じていた。若者は、「美味しい」よりも「見た目やインスタ映え」への評価が高く、和菓子よりも洋菓子の購入が圧倒的に高くなった。また「価格」もお土産の購入に強く影響し

ており、部活や研究室など多人数に購入する際には、コスパの良いものを選ぶ傾向にあることも明らかとなった。家族向けには和菓子が登場しており、仲の良い友達には、少し高価でも、話題性があつたり、一緒に楽しめるような、お菓子の評価が高かった（図6）。またテイクアウト商品については、「茶釜」が学割制度をとっており、テイクアウトで10% OFFや、かわいいストラップがもらえることが評価をあげた（図7）。味で評価が高かったのは「hug」のお茶カフェラテだが500円と価格設定が強気で、若者には美味しいが気軽に手が出ない価格である事が明らかとなった。



図5. 検証したお土産の一部(左)とインスタ映えて評価の高かったお菓子(右)



図 6. 評価の一例



図 7. 評価の様子

b. お茶カフェの評価

お茶カフェは10店舗について、店の雰囲気、味、価格、静岡らしさ、料理へのこだわり、インスタ映え、過ごしやすさを5段階で評価してもらった。最も評価が高かったのは「San grams」で、味以外はすべて5点満点であった。「茶葉をブレンドしていないシングルティーでその茶葉本来の味がわかり良かった」や、「素人でもお茶が好きになれる工夫がなされ、お茶に詳しくなる」と評価されていた(図8)。次に評価が高かったのは、「日本庭園茶室(駿府城公園)」で、「本格的なお茶に親しめる」と評価しており、和菓子のグレードの高さも評価されていた。庭園を見てゆっくり過ごす場所でもあるため、庭園への入場料が必要となり、価格が高くなるのがネックとなったようであった(図9)。若者は雰囲気で店を選びがちと考えていたが、飲むお茶については、本来の美味しさもしっかりと理解していることが明らかとなった。更には、一緒に出される和菓子の味もしっかりと評価しており、お茶は美味しいが、和菓子里に力を入れていない店では、和菓子がいらないと評価されていた。価格としては、ドリンクとお菓子のセットで500円前後、ドリンクとジェラートで700円を切れば、評価が高く、ドリンクとジェラートで800円を超えてくると評価が厳しくなることがわかった。



図8. 高評価の San gram

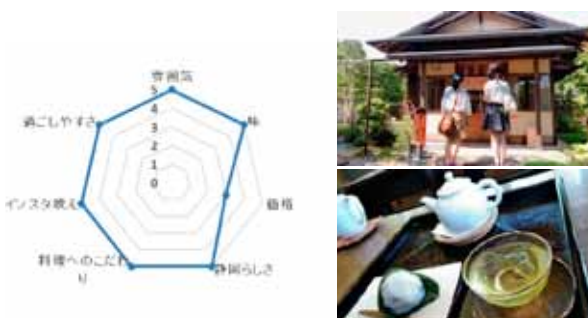


図9. 高評価の日本庭園茶室(駿府城公園)

c. ドライブスポットの調査

昨年の提案に、お茶景観の維持や活用について議論もされており、今回の若者向け情報パンフレットに、ドライブスポットとして、茶景観を取り扱うこととした。静岡市内で、茶景観と富士山が撮影でき、途中で休憩ができるカフェや、食事をする場所があるところを事前に調べ、その中で最もこれらの条件に合うと考えられた水見色に足を運んだ(図10~12)。水見色では、昨年から築150年の古民家の一部を改修したカフェも営業しており、ゆっくりと一日を過ごすのに格好の場所であった。水見色を更に奥に進んだ高山市民の森では、静岡市が一望でき、富士山も顔を出している。学生も「また来たい」と声をそろえていた。運が良ければ、特別天然記念物の「カモシカ」に出会うこともできる。



図10. 古民家カフェ(水見色)



図11. 高山公園(水見色)



図12. きらく市食事処(水見色)

現在、学生が前述した評価を元にパンフレットの原案を作成し、構成（依頼）を平行して行っている。パンフレットは、A5 サイズで 8 ページを予定している。以下に一部お土産ランキングの原案を示す（図 13）。パンフレット納品は 3 月 22 日を予定している。

3. 商品化への取り組み

若者視点のお茶菓子の商品化に向けて、協力してくださる静岡菓子組合杉本様との話し合いが平成 30 年 10 月 30 日に行われた。学生の方案を元に、杉本様が試作を行って下さり（図 14 右）、今後、平成 31 年 2 月 26 日に 2 回目の話し合いが行われ、更にブラッシュアップしていく。



図 14. 商品化に向けた話し合いの様子

4. まとめ

本プロジェクトは、昨年の学際科目で抽出された静岡市の茶産業の課題である、情報発信について、若者視点による茶情報冊子の作製および提案の実現化へ向けた取り組みを行った。本プロジェクトによって、若者にお茶を普及させていくためには、若者の意見を取り入れることの重要性を強く感じた。彼らは美味しい

ものをきちんと判断する上で、最も重要視するものが「見た目」と「価格」である事が明らかとなった。全員が「美味しい」と評価したお菓子 A は、「見た目が残念」という評価を得ていたが、味に絶対の評価を得ているため、デザインにこだわれば、若者を虜にできる可能性があることがわかった。

今後は 3 月に仕上がるパンフレットの評価を行い、よりブラッシュアップされた若者向けのお茶情報冊子を目指していく。

■本プロジェクト参加メンバー

竹下 温子 教育学部准教授（プロジェクト代表者）
近藤 優歌 教育学部国語 3 年
栗田 桃子 教育学部家庭科 3 年
木村 精治 お茶のまちづくり推進協議会
和田 昌之 静岡市 農業政策課
柴田 智子 静岡市 農業政策課

■本プロジェクト協力メンバー

小林 タバサ 人文社会科学部 3 年
佐野 未来 教育学部英語 4 年
塚本 麻理恵 静岡県立大学 3 年
杉本 様 静岡菓子組合
教育学部家庭科 3 年生

上記、協力下さった学生さんや、静岡大学教育学部家庭科のご協力いただいた学生さんに感謝申し上げます。



図 13. パンフレット一部掲載

大学と地域が共に伊豆の自然環境を楽しむプロジェクト

徳岡 徹 | 理学部准教授

連携先：湯ヶ島地区地域づくり協議会、伊豆市観光経済部

1. はじめに

伊豆半島の中心部に当たる天城山やその麓の里山には豊かな自然環境が広がっている。静岡大学理学部では伊豆市湯ヶ島地区の方々の協力を得て、天城フィールドセミナーハウスを設置し、ここを拠点として実習や研究活動を行っている。わたしたち理学部植物系統分類学研究室では伊豆半島の天城山を中心とした様々な地域で植物相および植生に関する研究やこの地域に生育する植物の類縁関係やその分類を研究してきた。この天城フィールドセミナーハウスに近い鉢窪山や丸山には非常に多くの植物種が自生しており、その生育する植物種のリストも作成されている。しかし、このような植物多様性が高い地域が身近に存在していることは、意外に知られていない。植物を分類する（見分ける）場合、植物の様々な形態を理解することが必須であるが、それ以外にも手触り、匂いなど様々な特徴がある。このような特徴は、実際に植物が生育している場所で自分の五感で体験することでより理解することができる。この植物多様性の高い湯ヶ島地区は植物を理解するのに絶好のフィールドであるといえる。また、植物の様々な特徴には実験的な手法で観察するような特徴もある。中学校の理科の教科書にはそのような特徴の一つとして葉の葉脈についての項目がある。教科書には代表的な種について詳しく説明されているが、実際には様々な葉脈があり、容易に様々な植物を観察できるこの地区は絶好の場所であると言える。

そこで、今回の事業では伊豆市湯ヶ島地区の豊かな自然環境を利用して地元の植物やその植物集団をより理解することを目的として、自然観察会と植物の葉脈標本および葉の乾燥標本の作製会を実施した。

2. 内容

平成 30 年 7 月 29 日に鉢窪山から丸山へのハイキングコースにて植物を観察する自然観察会を実施した。また、8 月 20 日には伊豆市役所湯ヶ島支所にて植物の葉脈標本および葉の乾燥標本の作製会を実施した。

・自然観察会（7 月 29 日）

静岡大学理学部天城フィールドセミナーハウスを出発点として、鉢窪山から丸山へのハイキングコースを歩きながら植物の観察を行った。観察会の周知には伊豆日日新聞に記事を載せていただいたり、天城中学校や湯ヶ島地区地域づくり協議会に協力していただき告知を行った。事前に参加者の人数を確定する必要があるため、伊豆市湯ヶ島支所に参加受付の事務作業を協力していただいた。当日は伊豆市だけでなく、熱海市や三島市などの遠方からも参加者があり、合計 14 名で観察会を行った。朝 9 時に天城フィールドセミナーハウスに集合し、準備体操を行った後、出発した。

先ず踊子歩道を歩きながら、山地に普通に見られる植物の観察を行った。アカガシ・シラカシ・シロダモ・イヌガシなど見分けるのが難しい植物にもチャレンジしたり、ツチアケビのような特異な植物も観察することができた。



踊子歩道での植物観察

野畔から鉢窪山への登山道に入った。参加者の中にはジオガイドとして活躍している方もおり、露頭の観察も行った。登山道ではタマアジサイ・ヒサカキ・ヤブツバキ・コメツツジなどの植物が観察できた。また、ミヤマシキミとシキミが同じ場所に生育している場所があり、どのように区別するのか葉の香りの違いなど興味深く観察できた。鉢窪山はジオサイトとしても紹介されている山で、頂上には噴火口跡がある。噴火口跡の中に入り、参加者みんなでここが噴火していたこ

とを想像して楽しむことができた。噴火口跡の近くには開けた場所があり、富士山を望むことができた。昼食後、鉢窪山から丸山へ向かった。リュウブ・イヌシデなどの植物を観察した。また、ニホンジカによる被害を受けているイヌツゲの大木の樹皮を観察し、現在の森林の環境問題についても考えた。丸山の山頂にはブナとヒメシヤラが優占する森林が広がっており、天城山の典型的な植生を観察することができた。天城フィールドセミナーハウスには午後3時に帰着した。参加者からはそれぞれの植物の特徴や伊豆の自然環境について多くのことが学べたと好評であった。



鉢窪山への登山道

・標本作製会（8月20日）

伊豆市役所湯ヶ島支所の会議室において、「夏休みの宿題」応援企画として標本作製会を行った。夏休みの宿題応援企画としているが、保護者や大人の方にも参加していただいた。当日は合計12名の参加があった。作製会は1時間半の講座を2つ行った。1つ目の講座はいろいろな植物の葉脈標本を作成した。材料はヒサカキ、イチョウを用いた。前日にヒサカキとイチョウの葉を市販のパイプ洗浄剤に浸しておいたものを、当日水洗した。受講生はそれぞれの葉を皿にとり、歯ブラシで叩いて、余分な葉肉を取り除いた。葉脈だけになった葉を食紅で染色し、乾燥させて、ラミネートフィルムに挟んだ。ヒサカキはきれいな網状の葉脈を持っているのに対して、イチョウでは二又分岐する葉脈になっていた。参加者もこのような違いや葉脈そのものの美しさに感動していた。この観察に用いる材料や道具は全て簡単に手に入るものとなるように工夫した。一般的な葉脈標本作製法では、葉肉を取り除くために劇物である水酸化ナトリウムを使うことが一般的だが、手に入れることが困難で危険であることから、市販のパイプ洗浄剤を使用した。また、道具も全て100円均一ショップで市販されているものを使用した。

2つ目の講座は葉の乾燥標本を作製した。参加者はグループになり、湯ヶ島支所の周りに生育している植物の葉を採集した。これらの植物の名前やその特徴を講師と学生に教わりながら、葉を一つ一つ採集袋に入れていった。10種類程度採集した後、会議室に戻り、きれいに紙に挟んでいった。受講者はこれらを帰宅後1週間乾燥させ、台紙に張って完成させた。

3. まとめ

この事業を実施することにより、伊豆湯ヶ島地区の植物多様性を深く理解することができた。また、この事業に参加した学生も実際に地域の方々とふれあうことで、様々な経験を積むことができた。湯ヶ島地区地域づくり協議会の方や伊豆市役所湯ヶ島支所の方々と協力して事業を実施することで、連携の強化ができた。今後もこの事業を続けていくこととして来年度の事業計画を作成中である。

4. さいごに

この活動を実施するにあたり、湯ヶ島地区地域づくり協議会には地域の方々への周知や実施にあたってのさまざまな協力をいただきました。また、伊豆市観光経済部にはこの実施にあたっての会場の提供や受付の事務作業等の協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

■本プロジェクト参加メンバー

徳岡 徹	理学部准教授（プロジェクト代表者）
関口 岳志	総合科学技術研究科 修士2年
早藤 徹郎	総合科学技術研究科 修士1年
志水 茉衣子	総合科学技術研究科 修士1年
北堀 空	理学部生物科学科 4年
田岡 泉美	理学部生物科学科 4年

浜松市と大学との連携事業 ～大学生による講座～



Kids Science Café（顧問・立岡 浩一 | 工学部教授）
連携先：浜松市

1. 事業概要

「浜松市と大学との連携事業」とは、浜松市内の協働センターなどの生涯学習施設において市内の大学に通う学生が日ごろの学びの成果を活用し、自らが講師として講座を運営するものである。市民と大学生がお互いに自己の学びを深めるとともに、浜松市と大学が連携・協力して生涯学習の取り組みを推進することを目的として開催している。市内 5 大学が事業に参加しており、静岡大学 Kids Science Café も昨年度から市内各地で理科工作教室を開催している。

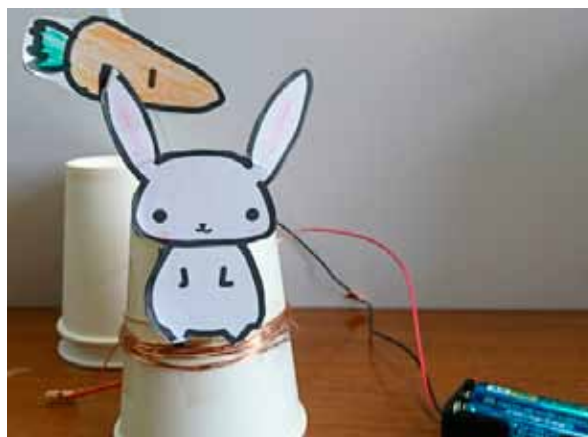
Kids Science Café は、児童を対象とした実験工作を通して、青少年の「理科離れ」や「物理嫌い」を防ぎ、理科好きの児童を育てるために発足した静岡大学の公認サークルである。事業が掲げる、「いつでも、どこでも、だれでも学べる学習環境をつくる」、「学習成果を適切に生かす」目的とサークルの趣旨が合致していると考え、本サークルも去年度から連携事業に参加している。「浜松市と大学との連携事業」に参加する前から小学校や施設などの依頼を受けて、児童に工作を教えていたが、工作をするにあたり児童の安全の観点から活動が制限され、満足する工作教室を開くことができなかった。事業に参加してからは、浜松市の協力を得られたことにより学習指導要領に沿った指導を受け、適切な講座を開催することができるようになった。浜松市との連携事業 2 回目となる本年度は、昨年度に引き続き理科工作教室を市内 3 箇所で行うこととなった。

2. 事業の実施内容

今回我々が行った講座は「ゆらゆらフレミングアニマル」という電気工作を扱ったものである。「ゆらゆらフレミングアニマル」は、電磁石を用いて磁力を発生させ、スイッチの切り替えにより動物のイラストを動かす工作である。この工作は ①コイルを巻くだけで作成できる手軽さ ②見えない力による挙動の不思議さ ③リニアモーターカーなどの身近なものへ応用されているという話題性 という三つの要素を含んでいる。加えて、電磁石は小学 5 年生で取り扱う内容で

あることから、小学 5 年生に満たない児童には理科が好きになるきっかけと予習、小学 5 年生以上の児童には学校で習ったことの復習とより深い内容理解の助けとなる。以上のことから我々は児童の理科への興味を引くのに適した題材であると考えた。

工作物は紙コップやボール紙など家庭で手に入る材料で構成されており、実に簡素である。工作教室を行った後も児童が家で工作を作り直したり、工夫したりできるように作成手順書を作成し、配布した。一方、技術面ではある程度の器用さが必要であり、またコイルを作るための銅線の先が作成者を傷つける恐れがあることから、この工作の対象を小学生とし、安全のため銅線の先を丸める工夫を施した。Kids Science Café の目的である児童への理科の普及を達成するため、工作を始める前に、作成する工作物の原理や身近な応用について解説した後、工作物の安全性についても説明した。



工作「ゆらゆらフレミングアニマル」

以下に今年度の実施内容を掲載する。

【第 1 回】2018 年 8 月 20 日（月）13:30 ～ 15:00

場所：天竜区 浦川ふれあいセンター

対象児童：小学 1 ～ 6 年生

募集定員：20 名

【第 2 回】2018 年 8 月 25 日（土）9:30 ～ 11:00

場所：北区 みをつくし文化センター

対象児童：小学 3 ～ 6 年生

募集定員：20 名

【第 3 回】2019 年 2 月 16 日（土）9:30 ～ 11:00

（地域連携応援プロジェクト実施期間外）

場所：南区 可美協働センター

対象児童：小学 1 ～ 6 年生

募集定員：20 名

プロジェクト実施は 8 月以降となったが、大まかな実施計画は 7 月の各協働センターと静岡大学との顔合わせにて決定した。後日、開催にあたり日程及び参加児童の対象学年を開催場所である各協働センターのご担当者とメール等で話し合った。

浦川ふれあいセンターでの実施は、山間部故の夏休みの学習機会の乏しさと児童数から、日程を 8 月に、対象児童を小学 1 年生から 6 年生とした。みをつくし文化センターでの実施も同様に、夏休みの学習の助けとするため、日程を 8 月とした。可美協働センターの実施は、大学生講師の試験日程を考慮して 2 月としたが、2 月では参加児童が少なくなるという危惧が生じたため、対象学年を小学 1 年生から 6 年生とした。

3. 事業の成果と課題

以下に 2019 年 2 月 15 日現在までのプロジェクトの成果と課題について記述していく。

今年度第 1 回の講座となった天竜区浦川ふれあいセンターでの工作教室には講師 6 人、児童 20 人が参加した。山間部に立地する浦川小学校の児童数が少ないこともあり、参加した児童たちは学年を超えて仲が良く、終始和やかな雰囲気の中、講座が進められた。児童からは「普段は家でゲームをするか、外で遊ぶため、今回のような理科工作教室に参加して面白かった」との意見をもらった。また、開催施設からは、「大学生講師が丁寧に児童に向き合っていて、雰囲気も良かった」「山間部での連携事業が少ない中で、今回の講座

は貴重な機会となった」との評価をいただいた。この第 1 回の講座では、山間部での理科学習の普及と夏休みの児童への学習機会の提供の両者を達成することができた。



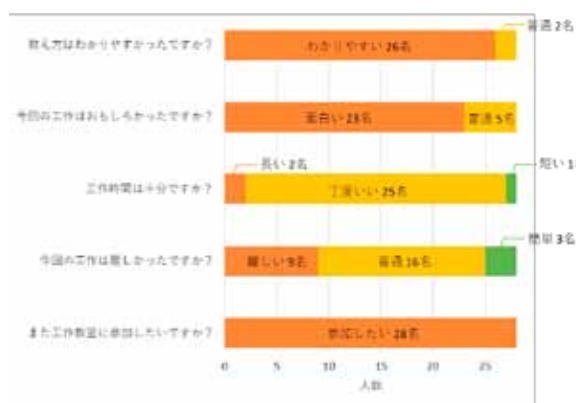
浦川ふれあいセンターでの活動の様子

第 2 回の講座となる北区みをつくし文化センターでの工作教室には講師 6 人、児童 8 人が参加した。講師の人数に対して児童の人数が少なく、児童は初めこそ緊張していたが、講座の後半では理科のクイズや共通の話題で講師と打ち解け、積極的に会話をするようになった。開催施設からは、「講座の導入時の発問や言葉かけが講座の内容を左右するので、特に大切にしてほしい」との要望をもらった。児童に理科工作を楽しんでもらうためには、工作内容の充実だけでなく楽しんでもらうような環境づくりが必要であると分かった。



みをつくし文化センターでの活動の様子

両講座に参加した児童 28 名を対象に行ったアンケートの結果では、多くの児童が「教え方がわかりやすかった」「工作が面白かった」「また参加したい」と回答し、工作教室が好評であったと分かった。一方、児童の工作の難易度の感じ方にはばらつきが見られた。これは、理科を学校で学んでいない低学年の小学生が参加していたことや工作物の内容が小学 5 年生に相当するものであることに起因すると考えられる。今後は、同様な原理をもつ低学年向けの工作を用意しておく、低学年の児童には難しいと思われる作成手順については講師が助けに入る、などの対策をとる事とした。



アンケート集計
(対象者：工作教室に参加した児童 計 28 名)

方法については児童に対する話し方や言葉遣いを改善し、次年度ではよりよい工作教室の雰囲気づくりをしていきたいと考えている。今後とも児童への工作教室を通した理科の普及に努め、日本の理系教育研究発展の一助となるように邁進していきたい。

■本プロジェクト参加メンバー

立岡 浩一	工学部教授（プロジェクト代表者）
須永 聖	工学部電子物質科学科 3 年
柳生 恭介	工学部化学バイオ工学科 3 年
中村 真悠子	工学部化学バイオ工学科 3 年
天野 ちなみ	工学部化学バイオ工学科 2 年
青木 美奈	情報学部情報社会学科 2 年
市川 幸太	工学部化学バイオ工学科 1 年
水谷 優太	工学部化学バイオ工学科 1 年
山元 大誠	工学部数理システム工学科 1 年
福田 理穂	工学部数理システム工学科 1 年
久保田 幹也	工学部機械工学科 1 年
山内 剛治	浜松市市民部創造都市・文化振興課 生涯学習推進グループ

第 3 回の可美協働センターでの工作教室では、実施済の 2 回の工作教室でのアンケート結果で「工作が難しかった」と回答した人が多かったことを踏まえ、工作の改善を行うことにした。前講座では、コイルを作成する際に斜めになっている紙コップの側面にエナメル線を巻く作業に苦勞している児童が多くみられ、作成時間も長かかった。そのため、エナメル線を巻く本体を紙コップからトイレットペーパーの芯に変更した。これにより、低学年の児童でもエナメル線が巻きやすく、作成時間を短縮できる。加えて、コイルの巻き数も多くできるため、工作物がより大きな挙動を示すようになる事が期待できる。

4. まとめ

去年度引き続き市内の協働センターでの工作教室を開催し、多くの児童に理科への興味や関心を引くことができた。今回の連携事業では、山間部における理科体験の機会の提供による成果を収めたため、引き続き山間部への理科工作教室実施を積極的に行っていきたい。開催施設から指摘を受けた児童への講師の指導

浜松市北区三ヶ日町における観光活性化のためのワークショップ事業

杉山 岳弘 | 情報学部教授

連携先：三ヶ日町観光協会、NPO 法人 ITOE

1. はじめに

現在、三ヶ日町観光協会は、観光の活性化に向けて取り組んできているが、一過性かつ単発のイベントが多く、また、全国区のブランドも「三ヶ日みかん」しかなく、持続可能な観光化の課題を抱えている。

また、若いスタッフの不足などで、Web ページは古い情報のまま更新が滞っており、観光データベースの整備や Web や SNS などでの情報発信についても進んでいない。さらに、浜松・浜名湖 DMO が進む中、新しい観光プランの発案など若い人のアイデアが必要とされている。

本事業では、三ヶ日町において、持続的かつ多彩な観光化を実施していくために、学生が学んできた、Web や SNS などでの情報発信手段、企画やアイデア発想法などを活かして、Web ページの設計、SNS などでの情報発信、観光プランワークショップを行う。これらにより、三ヶ日町の観光資源を抽出、分析、整備し、その価値を内外に広めることを目的としている。

2. 実施概要

月 1 回のペースで、三ヶ日町観光協会と打ち合わせを行い、観光スポットの資産化、Web データベースの設計、観光プランワークショップの準備を行う。次に、観光客向けの観光スポット Web データベースの構築、観光プランワークショップ（アイデアソン）を実施する。大まかなスケジュールは以下の通りである。

毎週火曜日 16:00～17:30 学生ミーティング
月 1 回 14:00～16:00 全体ミーティング
10月～12月 観光プランワークショップ in 三ヶ日
1月 アイデアソンの結果の公開

3. 実施報告

三ヶ日のホテルリステル浜名湖で 11 月 25 日（日）、12 月 2 日（日）の 2 日間にわたり、観光プランワークショップとして、三ヶ日観光アイデアソン＆プレゼンテーションコンテストを行った。

以下に、（1）広報活動、（2）当日に向けた準備、（3）当日の流れ、（4）事後処理および内部アイデアソン、の 4 つについて述べていく。

（1）広報活動

アイデアソン参加者および見学者を募るため、以下の宣伝活動を行った。

- ・チラシ / ポスターの作成・配布：学内掲示、浜松市内の協働センター、浜松市内の高校 / 大学、浜松市役所、協賛、Facebook、旅館、三ヶ日町観光協会に配布



図 1：チラシの裏表

- ・公式サイトの作成・運営：最新の情報を掲載



概要

「三ヶ日観光アイデアソン＆プレゼンテーションコンテスト」は、2日間にわたって三ヶ日の魅力として発信する観光スポットを、高校生や大学生がグループになって、話し合い、アイデアを競うイベントです。1日目には、グループに分かれ、アイデアソンの形式で三ヶ日観光ツアーとアイデアを出してもいい、さらに現地調査をすることもできます。2日目には、そのアイデアを基に三ヶ日観光ツアーをブラッシュアップし、そのプランをプレゼンテーションで競い合ってもらいます。審査による賞品や参加者への賞品を授与します。

※本イベントでの優秀なアイデアは、今後、三ヶ日町の持続的な観光化を実現するために、三ヶ日町観光協会と連携していく計画です。

第1回 11月25日(日)		第2回 12月2日(日)	
時間	内容	時間	内容
9:30~	入口にて受付	9:30~	受付・自由参観
10:00~	開会挨拶	10:00~11:00	意見交換会(ポスターなど制作・発表、プレゼン準備)
10:30~11:30	三ヶ日紹介	12:00~13:00	昼食(企画、お弁当)
11:30~12:00	意見交換会(アイデアソン)	13:00~14:30	プレゼン準備
12:00~	昼食	14:30~15:30	最終発表・プレゼンテーションコンテスト
12:30~	意見交換、決めたスポットへ現地調査	15:30~16:00	結果発表・表彰・閉会
13:00~	意見交換会(ブラッシュアップ)		
13:30~14:30	中絶発表		
15:30~16:00	閉会		
16:00~	懇談のあいま		

図 2：公式 Web サイト

また、三ヶ日観光アイデアソン公式サイト内に以下のデータベースを実装した。

- 三ヶ日観光資源スポット：各観光地の名称や住所、概要といった情報を登録、地図上に表示。これは昨年度の成果である [1]。
- 三ヶ日の〇〇3選：三ヶ日の「景色」「体験」「グルメ」「カフェ」「神社」「お土産」の3選を表示。表示する内容は、観光地名称、観光地 HP リンク、写真。



図 3: 三ヶ日の景色 3 選の表示例

- 浜松・浜名湖ツーリズムビューローの浜松だいきネット（市内の観光関係で最大のアクセス数）[2] へのバナーとリンクを掲載していただいた。



図 4: だいきネットに掲載されたバナー

- SNS (Instagram/Twitter)：準備状況等を随時発信。

なお、参加者のエントリーは、チラシ、ポスターに掲載した QR コードおよび、Web サイトに掲載した URL の応募フォーム記入から登録とした。



図 5: 公式 Twitter・Instagram

(2) 当日までの準備

- ファシリテータの配置：アイデアソンを行うにあたり、三ヶ日について詳しくない参加者の話し合いを円滑に進めることを目的とし、各グループに 1 名、学生をファシリテータとして配置した。事前にファシリテーション [3] に関するゼミを実施することで、ファシリテータとしてのスキルを取得した。
- 配布する資料の作成：アイデアソン当日、参加者や見学者に配布するための資料を作成した。またアイデア譲渡などの同意書も作成した。
- 会場のレイアウトおよび設営：会場となる「ホテルリステル浜名湖」へ実際に足を運び、打ち合わせを行った。看板や会場レイアウト、現地調査、当日のプレゼンテーションの手順などの確認を行った。

レイアウト案

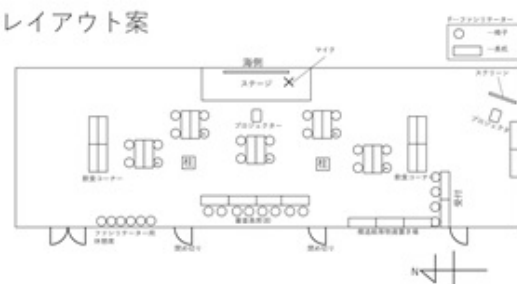


図 6: 会場レイアウト図

- 審査員、来賓、後援などの対外的な調整：審査委員には、公的な観光関係者、観光事業者、大学関係者、地域の銀行を選定した。来賓は浜松市の観光関係の課長、浜松・浜名湖ツーリズムビューローの事業本部長、北区（三ヶ日の属する区）の区長に依頼した。後援は、アイデアソンの賞品・景品や体験などを提供する地元の事業者に依頼した。

当日は、5 チーム 13 名（大学生 8 名、高校生 2 名、一般 3 名）の参加者により、三ヶ日観光化のアイデアソンと現地調査そしてプレゼンテーションを実施した。



図 7: 手前：審査員 奥：見学者

(3) 当日の流れ

以下に 2 日間の実施手順を示す。

11 月 25 日（日）

【①アイデアソン】三ヶ日を知り、アピールする観光資源を決定するための意見交換で、三ヶ日町の様々な観光資源を知った上で、どの資源をアピールしていくか、グループで話し合い、いくつか抽出する。

【②現地調査】抽出した観光資源を実際に巡検し、テーマを決め、地域の宝となる観光資源や観光化のアイデアをブラッシュアップする。



図 8: アイデアソン（左）、現地調査（右）

【③テーマ決め】実際に現地を訪れた後、その観光資源を内外にアピールしていくためにふさわしいテーマと具体的なプランや PR 方法などについてグループで話し合う。

【④中間発表】審査員に対して、途中経過を発表し、アドバイスをもらいつつ、同時に他グループとの質疑応答を行う。

12 月 2 日（日）

【⑤プレゼン準備】中間発表で出た意見を参考に、ブラッシュアップし、テーマに沿った具体的なプランを決定するための意見交換、最終発表に向けてプレゼン準備と、グループのアイデアを完成させる。

【⑥最終発表】審査員および見学者に対して、グループの成果を発表する。発表方式については特に定めず、模造紙によるポスターや PowerPoint などのプレゼンテーションツールなども使えるようにする。発表は、グループ毎に順番に行い、審査員 10 名（浜松市の観光事業者部長、三ヶ日町含め周辺観光協会、観光事業者、大学他）により、「アイデア」「プレゼン」「実現可能性」の 3 項目を 0～5 点で評価した。

表 1: アイデアの概要

タイトル	キャッチコピー
三ヶ日自転車道	自転車にちょっとうるさい町、三ヶ日
三ヶ日と宝さがし	「よそ者」と「地域」でつくる三ヶ日観光
猪鼻湖一周の旅	Let's Mikkabi
教育旅行としてのみかんオーナー制度	みかんしかないんじゃない、みかんがあるんだ
三ヶ日でのグランピング	汽水湖の産物や自然を楽しめる

その後、審査会議を引き、総合的に最も優れた提案をしたグループに授与される「最優秀賞」、優れたアイデアを提案したグループに授与される「アイデア賞」、最も優れたプレゼンをしたグループに授与される「プレゼン賞」、観光協会会長の心に最も響いたグループに授与される「三ヶ日町観光協会会長特別賞」を選定した。なお、参加者全員に「参加賞」が贈呈された。表彰式では、賞状と景品が贈られた。

審査結果は以下の通りである。

- 最優秀賞：三ヶ日自転車道
- アイデア賞：三ヶ日と宝さがし
- プレゼン賞：猪鼻湖一周の旅
- 三ヶ日町観光協会会長特別賞：三ヶ日自転車道



図 9: 審査員の前でプレゼンテーションを行う高校生参加者



図 10: 審査結果を集計し、受賞チームを決定する



図 11: 表彰を受ける最優秀賞受賞チーム

(4) 事後処理および内部アイデアソン

アイデアソン終了後、参加者へのアンケートやスタッフの反省など次回に向けての改善点などをまとめた。さらに、各グループのアイデアの資料や発表資料を回収し、グループごとの三ヶ日の印象、アイデアの着想、最終的なアイデアをまとめた資料を作成した。このアイデアや着想をもとに、実現に向けた、三ヶ日町観光協会関係者内で、内部的なアイデアソンを行っ

た。最優勝賞の三ヶ日自転車道プロジェクトを進めていく上で、他のアイデアの意見や考え方を取り入れるなど、これまでの視点とは異なった活発な意見交換が行われた。

また、アイデアソンに見学に来ていた三ヶ日町出身の人が、自転車道のアイデアに強く共感し、すぐに観光協会に連絡をし、中心となって実現に向けて実施したいと申し出があり、現在、企画、組織作り、実現方法に向けて動き出している。

4. 事業の結果と効果

5 チーム 13 名の参加者、10 名の来賓及び審査員に加え、20 名近くの見学者の方にもお越し頂き、大いに盛り上がった。公式 Web サイトやポスターなど事前の広報活動の結果、三ヶ日地域の内外から高校生、大学生、一般と広く参加者が集まり、幅広い視点で三ヶ日の観光を検討することができ、三ヶ日の新たな魅力を発見した企画も多く見られ、アイデアソンとして実質的に成功したと言える。

参加者からとったアンケートでは、フィールドワークの時間が短い、説明不足等による不満の声があがるなど、課題も残ったが、現地調査の充実やファシリテータの有効性など、高い満足度が得られた。以下に、アンケート結果を含む、良かった点と反省点を挙げる。

- ・ファシリテータが介入することによって、三ヶ日について詳しくない参加者でも、様々なアイデアを提案することができた。
- ・現地調査を行うことにより、現地の様子が分かり、またデータベースにはない情報を得て、偶発的な新しいアイデアを生み出した。
- ・三ヶ日に詳しくない参加者のアイデア、着想をもとに内部アイデアソンを行うことで、新しい視点かつ実現可能性のあるアイデアへ拡張された。
- ・各グループに 1 人以上三ヶ日町について詳しい人を参加させることで、より活性化できた可能性がある。
- ・審査員からのフィードバックを十分にもらうことで、最終発表へのさらなるブラッシュアップができる可能性がある。
- ・参加者に若干の偏りがあり、より幅広く集めるために、募集や宣伝方法を改善する必要がある。

最優秀賞のアイデアについては、現在、三ヶ日町の有志で集まり実現に向けての議論が始まっている。また、本活動に対して、浜松・浜名湖ツーリズムビューローからも協力体制の依頼があり、新たな連携が始

まっている。

学生達（10 名の情報学部生）にとってもこれだけの大きな規模のイベントを学生が中心となって運営し、多くの学びと貴重な経験となった。よって本事業は大変有意義であったと考える。



図 12: 集合写真

謝辞

本事業は「平成 30 年度 静岡大学 地域連携応援プロジェクト」のご支援を受けています。ここに感謝の意を表します。本事業をご後援いただいた、浜松・浜名湖ツーリズムビューロー様、静岡銀行様、遠州信用金庫様、静岡大学情報学部地域連携推進室様に感謝いたします。また、本事業をご支援していただいた、長治観光株式会社 ホテルリステル浜名湖様、株式会社東急リゾートサービス TOKYU Harvest Club 浜名湖様、割烹旅館 琴水様、三ヶ日製菓様、和洋菓子 入河屋様、はちみつ専門店 長坂養蜂場様、三ヶ日駅のカフェ グラニーズ様、炭火焼肉 三愛様、蔵茶房なつめ様、株式会社フードランド様、株式会社ジェーピーエム浜名湖 パラグライダースクール様、オフィスナッツ株式会社 クルージングサービス事業様に感謝いたします。

■本プロジェクト参加メンバー

杉山 岳弘 情報学部教授（プロジェクト代表者）
川西 美智子 情報学部情報社会学科 4 年 + 4 名
田中 歩実 情報学部情報社会学科 3 年 + 4 名
宮田 岳 NPO 法人 ITOE 理事長
中村 健二 三ヶ日町観光協会会長、株式会社フードランドグループ社長、内閣官房地域活性化伝道師

参考文献

- [1] 山崎夕輝ほか『三ヶ日町における観光資源のデータベース化と観光化への課題』, 観光情報学会第 15 回全国大会講演予稿集, 2018
- [2] 浜松だいきネット, <https://hamamatsu-daisuki.net>, (参照 2019-02-07)
- [3] 堀公俊 (2018)『ファシリテーション入門<第 2 版>』日経 文庫

小学生へのプログラミング教育支援事業

田中 宏和 | 情報学部教授
連携先：浜松市立西都台小学校



1. はじめに

田中宏和研究室では、浜松市内の小学校のプログラミング教育支援事業を行っています。2020 年に小学校でのプログラミングの授業が必修化されるため、小学生向けのプログラミング教育は日々関心が高まっています。私たちの研究室は情報学部で学んだ知識を生かして、地域の児童に対して何か支援できることはないかと考えたとき、プログラミング教育を見出しました。今年度は浜松市立西都台小学校のパソコンクラブで、合計 3 回のプログラミング教育を行いました。

2. プロジェクトの概要

今回は地域に生きる教育機関である静岡大学と浜松市立西都台小学校が結びつくことで、以下の 3 つの視点から今回のプロジェクトを企画して推進しました。

- ①楽しみながら論理的思考を身に付けること
- ②生活の中にコンピュータが活用されていることを実感してもらうこと
- ③問題解決には手順があることに気付くこと

子供たちが何かを作りたいと思い、その実現に向けて試行錯誤を繰り返してしていくなかで、問題解決には手順があることに気づくと同時に論理的思考自然にが自然に身につくと考えられます。

上記の①②③について、プログラミング学習用ツールである Scratch を利用し、その導入の定着を目指して活動を行いました。Scratch は現在、多くの小学校で採用されている最も人気のある学習ツールです。

3. 活動実績

(1) 授業内容

西都台小学校のパソコンクラブは小学 4 年生から 6 年生の計 28 人で構成されていました。授業は小中学生向けプログラミングツールである Scratch を用いて行いました。Scratch とは簡単なブロックを組み合わせ、画面のスク립ト（猫などのキャラクター）の動きを児童自身が設計し、言語使用に沿って命令文を作成してキャラクターを動かすというものです。本来のプログラミングのような難しいコードを記述するの

ではなく、プログラムモジュールであるブロックを組み合わせた変数値を設定するだけで操作できるので、児童でも扱うことができるようになっています。

(2) 各回概要

【第 1 回】

第 1 回は 6 月 18 日に実施しました。児童はパソコン自体の扱いも不慣れなうえ、Scratch を扱うことも初体験でした。そこで、児童の周りに配置した学生たちがパソコンの操作について適宜、丁寧に説明するようにしました。Scratch の操作はあまり難しくないため、基本操作の習得は早かったです。また、児童たちから「優しく頼りになるお兄さん、お姉さん」と思ってもらえるようにアットホームな雰囲気を演出するように心がけました。

【第 2 回】

第 2 回は 10 月 29 日に実施しました。第 1 回から半年近く期間が空いてしまったため、基本操作の復習から行いました。その後、簡単なゲームの作成を行いました。ディスプレイ画面の上部から落ちてくるミカンやリンゴをカゴでキャッチするゲームを作成しました。児童たちの基本操作の習熟は目を見張るばかりで想定していた時間よりも早く全員が作成することができました。



第 2 回の様子

【第 3 回】

第 3 回は年明けの 1 月 21 日に実施しました。第 3 回は右から流れてくるスク립ト（車など）を猫がジャ

ンプしてよけるゲームの作成を行いました。前回のアレンジキャッチゲームに比べて難易度が易しかったため、簡単に作成することができ、自由にアレンジする時間を多く取ることができました。とくに6年生は理解度が早いので、背景を設定したり、音を出したりなど、自発的に思い思いにアレンジしていました。



第3回のジャンプゲーム

でいる知識を小学校に提供することで児童たちのプログラミング教育だけではなく小学校の先生方からも頼りにされる存在になりたいと強く思いました。

また、今回のプロジェクトを通じて、私たちも大きく成長できたと実感しています。学校側の要望をよく把握したうえで、プログラミング教育の目的について自分たちで討議し、教材づくりから当日の授業の構成、児童のサポート体制について自分たちで考えて実施しました。実施後には問題点や課題について自分たちで討議し、次回に反映できるようにしました。また、大学で学んだ知識を社会に還元しそのことで喜んでもらえる人たちがいるということがどんなに素晴らしいことを学ぶことができました。このようなことは大学のなかだけでは学ぶことはできず、今回のプロジェクトを実施する機会に恵まれたことに感謝しています。

4. プロジェクトの成果

今回のプロジェクトでは回ごとに実施数日前に小学校を訪問し、事前にご担当の先生と打ち合わせを行い、授業の目標と教材、進め方など授業の構成について確認してから臨むようにしました。ご担当の先生と打ち合わせをしたとおりに、児童がプログラミングを面白いと思ってもらえた内容に仕上げられました。また、最終日にプログラミングの授業についての児童向けアンケートを実施しました。アンケート結果からは「プログラミンの授業は楽しかった」、「ゲームが作れて面白かった」などポジティブなコメントが多くあり、私たちの印象と同じでした。

プロジェクトを企画する上での3つの視点についての成果は以下になりました。

- ①アンケートの結果の通り、児童は楽しんで課題に取り組む、何故そのような動きになるのかなどを考えながら学習することができました。
- ②実際にコンピュータを扱うことによってコンピュータに親しんでもらうことができました。
- ③ブロックを順番に並べることによって、スクリプトの動きを考え、思うように動かすことができました。

教育現場での過労問題が報道されていますが、小学校の先生がたとお話していると、普段の授業の準備や学校行事、児童たちの生活指導などでとてもお忙しい日々を送られていることを実感しました。

プログラミング教育の本格的な導入が間近になり、先生方の負荷が増えていきます。私たちは大学で学ん

■本プロジェクト参加メンバー

田中 宏和	情報学部教授（プロジェクト代表者）
青木 瑞紀	情報学部情報社会学科 4 年
平野 絢花	情報学部情報社会学科 4 年
中村 優作	情報学部情報科学科 4 年
山内 惇熙	情報学部情報社会学科 4 年
栗原 啓志	情報学部行動情報学科 3 年
向井地 孝典	情報学部行動情報学科 3 年
江尻 陸	情報学部行動情報学科 3 年
林 風弥	情報学部行動情報学科 3 年
藤原 敦史	情報学部行動情報学科 3 年

絵本読み聞かせ会による地域活性化と 絵本の可能性発見プロジェクト

田村 敏広 | 情報学部准教授

連携先：静岡大学附属小学校絵本ボランティア、浜松市立城北小学校図書館ボランティア、NPO 雲を耕す会

1. 本事業の目的

現在、浜松市内の多くの小学校では、ボランティアによる絵本読み聞かせを積極的に実施している。各小学校等にて行われるこの活動は児童の情操教育や言語教育において非常に有意義だと考えられるが、ボランティアとして参加するほとんどが主婦であり、絵本やその読み聞かせに関する専門的知識に乏しく、またそれを学ぶ機会も少ないのが現状である。

さらに、様々な園児・児童が参加できる絵本の読み聞かせ会の地域社会におけるニーズは高い一方で、この読み聞かせ活動は小学校内に限られており、より広い地域社会の活性化や子どものより深い知的的好奇心創出に繋がりうる絵本読み聞かせの潜在力を活かしきれていない状況にある。

絵本読み聞かせにおけるこのような問題を踏まえ、本プロジェクトは以下の3つを主な目的として設定した。

- ① 絵本の読み聞かせボランティアに対する知識と技術のサポート
- ② 絵本読み聞かせ会を通じた地域活性化
- ③ 子どもにとって印象的で知的好奇心を掻き立てる体験となるような、新たな読み聞かせ活動の提案と実施

目的①では、小学校の読み聞かせボランティアの方を対象にした絵本学入門の講義や元アナウンサーによる実演練習などを行い、絵本に対する知識を深めてもらうこと、そして自らの読み聞かせを客観的に見直してもらうことが狙いである。目的②は、主に浜松中區城北地区の地域住民を対象に絵本の読み聞かせイベントを開催し、絵本を通じた地域活性化を狙う。目的③では、これまでの絵本読み聞かせに対して、新しい形の読み聞かせを模索することで絵本の魅力と可能性を探ることが狙いである。

2. 実施概要

『大人のための絵本ワークショップ』

日時：平成 30 年 9 月 29 日（土）10:15~12:30

場所：浜松こども館分室

参加人数：25 名



絵本ボランティアや絵本に興味をもつ方を対象に2部構成のワークショップを行った。第1部では、プロジェクト代表者である静岡大学情報学部田村が、絵本学の入門となる講義形式のワークショップを実施した。第2部では、常葉大学短期大



『絵本ワークショップ&おはなしコンサート』

日時：平成 30 年 10 月 14 日（日）

場所：池川邸（浜松市中区城北）

参加人数：78 名



地域 NPO 法人「雲を耕す会」の協力を得て、浜松市中区城北にある池川邸にて室内・屋外の絵本読み聞かせ・おはなしコンサートを実施した。池川邸は築 120 年の屋敷と樹齢 350 年を越す楠があり、歴史的にも高い価

値をもつ屋敷である。池川邸は通常非公開で、その存在を知らない地域の住民も多く、このような歴史的建築物での開催は地域活性化に資するものであったと言える。



前半は、池川邸庭園にて常葉大学短期大学部宮本淳子講師（元アナウンサー・ラジオパーソナリティ）による発声練習を行い、参加者は青空のもとで和やかな雰囲気の中、腹式による声の出し方を練習した。後半は、室内において、語りとピアノユニット「どれみ」による絵本『スイミー』と『おだんごぱん』のピアノ伴奏や動く絵本を用いた読み聞かせと、静岡大学教育学部附属浜松小学校「昼ファンタジア」による『はらぺこあおむし』の大型絵本を用いたコンサート形式の読み聞かせなどを行った。池川邸の座敷は参加者でいっぱいになり、皆で絵本にあわせて合唱するなど、終始楽しく読み聞かせが行われた。



『絵本の部屋 in テクノフェスタ』

日時：平成 30 年 11 月 10 日（土）、11 日（日）

場所：静岡大学情報学部棟

本事業のサテライト企画として、田村研究室の学生の協力により、静岡大学テクノフェスタ in 浜松キャンパスにて「絵本の部屋」を実施した。この企画では、学生による絵本分析や絵本の展示、iPad を利用したデジタル絵本の作成、手作り衣装を着て絵本の背景と合成するなど、大人から子どもまで楽しめるものであった。来場者も多く、絵本の楽しさを伝える機会

として、今後もこのような展示を継続していくつもりである。



3. 主な成果と課題

本事業は、絵本の読み聞かせボランティアに対する知識と技術のサポート（目的①）、絵本読み聞かせ会を通じた地域活性化（目的②）、子どもにとって印象的で知的好奇心を掻き立てる体験となるような、新たな読み聞かせ活動の提案と実施（目的③）を目指して行われた。ワークショップでの絵本学入門や読み聞かせの実践練習によって、絵本読み聞かせを行うボランティアや親への知識的・技術的サポートのみならず、大人から子どもまで絵本に興味をもつ多くの方に絵本の楽しさを伝えることができたのではないかと考えている。また、池川邸での絵本読み聞かせコンサートでは、地域活性化への貢献と新たな絵本読み聞かせの可能性を提示することができた。本事業では、ワークショップの開催回数も限られていたため、興味をもちながらも参加できなかった方が多くいた。「絵本読み聞かせのサポート」「地域活性化」「絵本の可能性の模索」の3つをキーワードにこのような活動を継続して行い、多くの人に参加してもらえる機会を創出していくことが今後の課題である。

■本プロジェクト参加メンバー

田村 敏広	情報学部准教授（プロジェクト代表者）
宮本 淳子	常葉大学短期学部日本語日本文学科講師
原野 里美	情報学部行動情報学科事務職員 / 絵本読み聞かせボランティア
鈴木 美紀	情報学部情報社会学科事務職員 / 絵本読み聞かせボランティア

地域住民及び大学関係者に向けた防災・減災啓発活動

岩田 孝仁 | 地域創造学環・防災総合センター教授

連携先：静岡新聞社 SBS、静岡市消防団第 14 分団、小鹿自治会、小鹿新町町内会、駿河消防署

1. 事業の目的

大学をはじめ地域内には災害時用トイレ・かまどベンチといった防災資源が数多く存在しており、災害時にはそれらの有効活用が求められる。また静岡大学では入学時に非常持出袋が配布され、学生個人としても災害に備える基盤を形成しやすくなっている。しかし、



図1 静岡大学非常持出袋 中身

そういった防災資源や非常持出袋の中身を確認したり意識したりする人は少ない。事実、非常持出袋についてはその中身を確認していない生徒が多いのが現状である。こういった状況下では、防災資源の効果を十分に発揮できないことが懸念される。また学生（特に下宿生）は地域に住んでいながら地域住民との関わりを持っていないことが多い。高齢化が進行し防災面においても自主防災会役員の高齢化等が問題となり得る現状では、学生に代表される若い力は重要な役割を占めるようになることが想定され現段階から地域住民とのつながりを持つ必要性がある。以上から本事業では、学内及び地域に存在する防災資源を実際に使用する中で学生及び地域住民の防災意識向上を図ること、またその活動を通して災害時に有効な学生と地域住民とのネットワークづくりを図ることを目的とした。目的達成のため地元消防団や地元自治会といった団体との連携を図り本事業を行った。なお本事業に参加する教員及び学生は「静岡大学学生防災ネットワーク（以下、学防ネット）」のメンバーである。

2. 事業の実施概要

「地域住民及び大学関係者に向けた防災・減災啓発活動」として学防ネットが主催及び協力した活動と、主な連携先を示す。

①平成30年11月17日(土)「静大祭」

静岡大学静岡キャンパスにて開催された静大祭で、
室内・室外の２ヶ所でブース出展を行った。

- ・室内：共通教育 A 棟 206 教室にて、パネル等を用いて学防ネットの活動紹介および静岡大学非常持出袋の中身紹介を行った。



図2 非常持出袋中身紹介



図3 室内ブースの様子

- ・室外：静岡大学静岡キャンパスのサッカー・ラグビー場にて、かまどベンチ及びハイゼックスを使用した炊き出し実演を行った。同時にサッカー・ラグビー場横にて消防車展示と起震車による地震体験を行った。



図4 かまどベンチ燃焼の様子



図5 起震車体験の様子

この活動では、静岡新聞社 SBS と連携して展示パネルとチラシの作成を行った。また炊き出しに使用した鍋は、実際の災害時の連携も見据えて地元の小鹿新町自治会からお借りした。

②平成 30 年 12 月 2 日（日）「小鹿自治会防災訓練」

小鹿公園にて開催された「小鹿自治会防災訓練」で、公園備え付けのかまどベンチとハイゼックスを使用した炊き出しと「防災ビンゴ」による防災啓発活動を行った。



図6 小鹿自治会防災訓練でのかまどベンチ燃焼の様子



図7 防災ビンゴ実施の様子



図8 使用した「防災ビンゴ」

この活動では、訓練前の事前協議及びかまどベンチによる炊き出しを小鹿自治会と、「防災ビンゴ」の運営を静岡市消防団第 14 分団と連携して行った。

3. 事業の成果

静大祭の活動では、まず室内ブースに関して学生のみならず地域住民の方に学防ネットの活動に関心をもって頂いた。非常持出袋の紹介については、「帰ったら確認してみよう」等の発言が出たことから今後の意識のきっかけとなった点で成果があったと考えられる。室外ブースでは、かまどベンチの実演及びハイゼックスで米が炊ける様子を見て「こんなベンチがあるんだ」「これはうちでも使ってみたい」との感想が出たことにより、防災資源に関心を抱き今後の活用につなげられた点は、一定の成果があったと考えられる。

小鹿自治会防災訓練では、静大祭での活動を受けてかまどベンチとハイゼックスの使用が実現した点が、地域住民が防災資源を活用し見直すきっかけとなったという意味で成果があった。ハイゼックスについては住民の方々から多くの質問や取り入れに積極的な意見が出たため、非常に上手く周知が出来たと考えている。また防災ビンゴは学防ネットのメンバーが考案した防

災啓発グッズであるが、このビンゴを通して住民が自らの持つ防災グッズを見直しそれについての質問が出たことは意識改革の面で成果だったと考えられる。

そして地元団体との連携面だが、消防団員や自治会役員から「若者の力が加わると、明るくなる」「これからもぜひ協力してほしい」というお言葉を頂いた。学生による活動が地域の力となることが示された。

浦田 紗季	地域創造学環アート&マネジメントコース 2 年
矢勢 才華	地域創造学環アート&マネジメントコース 2 年
中山 武揚	理学部地球科学科 2 年
菊池 優佑	理学部物理学科 2 年

4. 課題

静大祭の活動では主に SNS を用いて事前周知を行ったのだが、当日は当初の想定よりもはるかに少ない人数しか各ブースとも訪れていないという結果は周知不足に起因するところが大きいと考えられる。このことから、周知方法の改善の必要性が課題として示された。

小鹿自治会防災訓練での活動では、活動後のミーティングで運営側の人数不足が指摘された。このことから、来場者に広く防災啓発を行うため事前準備段階での確実な人数確保や運営方法の工夫が課題として示された。

5. 今後の活動について

今回の活動は地域に在住する日本の方が主な対象であった。しかし地域には外国の方も少なからず住んでいることを考慮すると、外国の方向けの防災教育も必要であると考えられる。地域の団体や住民の方と協同で、外国の方向けの活動を行う予定である（予定では 3 月 10 日に SBS・静岡県国際交流協会主催のイベントに協力予定）。なお、使用機材については助成金で購入した備品を活用し活動する予定である。また小鹿自治会防災訓練で使用した「防災ビンゴ」を活用したいという申し入れが他自治会からあり、今後広く活用していくことを考えている。

■本プロジェクト参加メンバー

岩田 孝仁	地域創造学環・防災総合センター教授 (プロジェクト代表者)
河村 拓斗	地域創造学環地域環境・防災コース 2 年
勝谷 勇介	地域創造学環地域環境・防災コース 2 年
上田 啓瑚	地域創造学環地域環境・防災コース 2 年
櫻木 哲朗	地域創造学環地域環境・防災コース 2 年
太田 智輝	地域創造学環地域環境・防災コース 3 年
平江 夏樹	地域創造学環地域環境・防災コース 1 年

消費者教育でつなぐ伊豆半島ジオパーク SDGs 推進プロジェクト

山本 隆太 | 教職センター特任准教授
連携先：伊豆半島ジオガイド協会

1. 本プロジェクトに至る経緯と目的

静岡県東部に位置する伊豆半島は、県内でも人口減少と高齢化が特に急速に進展する地域であり、地方活性化が喫緊の課題となっている。伊豆半島には火山や湧水などの恵まれた自然環境と、それを活用した温泉地や行楽地が数多く存在する。これらの資源を観光や教育、防災などに活用し地域振興を進めることを目的として、伊豆半島はユネスコのプログラムであるジオパークに取り組んでいる。2010 年 6 月に設立された伊豆半島ジオパークは、国内レベルの日本ジオパークを経て、2018 年 4 月に世界ジオパークに認定された。

世界ジオパークになった当初は各種メディアで盛んに取り上げられたが、2018 年 5 月以降の静岡県立沼津商業高校の調査では、伊豆半島内に暮らす住民のジオパークに対する関心は高くないことが判明した。こうした関心の低さについては従来からも指摘がなされており、例えば本学地域創造学環のフィールドワークで伊豆半島ジオパークを対象にしている学生は、伊豆半島ジオパークは生物や生活文化の側面よりも地質や地形ばかりが前面に出ており、ニッチな関心しか喚起しないことを指摘している。こうした課題意識について伊豆半島ジオガイド協会とも共有してきており、例えば 2018 年度には文学とジオパークをテーマとしたジオパーク地域ブロック大会や座談会が伊豆半島ジオパーク推進協議会やガイド協会により開催されるなど、人文的な側面からのアプローチが徐々に見られるようになった。

またこれとは別の課題として、世界ジオパークとしてユネスコの傘下に入ったことで、ユネスコが推進する SDGs（持続可能な開発目標）の推進に、より積極的に取り組む必要性が高まったことが挙げられる。現に日本ジオパークネットワーク（JGN）は SDGs に関する事業を展開し始めている。

そこで本プロジェクトでは、人文的な側面からのアプローチとしての「食」と SDGs に関わるアイデアを組み合わせ、それをジオパークの消費者教育の教材として落とし込むことを目標とした。

2. 本プロジェクトの概要

伊豆半島ジオパークにおける「食」と SDGs をコンセプトとした本プロジェクトを進めるにあたり、伊豆半島ジオパークに関する「食」についてのアイデア出しを行い、地元産品の鹿肉としいたけを活用したメニューを試行的に開発することとした。

続いて、食を SDGs の文脈で検討した。SDGs では持続可能な社会づくりに向けて国連で策定された 17 の目標と、それを構成する詳細な 169 のターゲットである。食は「持続可能な生産消費形態を確保する」（目標 12）に明示的に位置づけられることに加え、SDGs としては各目標を連携させることでより包括的な視点から、持続可能な開発のための活動が可能となる点に特色がある。そこで、生産消費に加え、地域の様々なモノやコト、ヒト、サービスのつながりとしての食を意識することで SDGs の取組みとした。またそのアウトプットとして消費者教育、とりわけ持続可能な消費行動などの点からの教材化を目指した。

なお、結果的に学生メンバーのほとんどが地域創造学環の伊豆半島ジオパークに参加する学生であり、想定以上にフィールドワークの活動と重複する点が多くなった点は反省すべきところである。

3. 地元産品による肉まんづくりの企画

伊豆半島には数々の特産品がある。とりわけ世界農業遺産に「静岡水わさびの伝統栽培」として登録されたわさびや、ジビエとして話題にあがる鹿肉、伊豆特産の原木しいたけなどが知られている。伊豆半島ジオパークはわさびやしいたけについて、ジオ農林業として地理的特産としての価値を説明している。そこで鹿肉を取り上げることとし、より食に着目した商品開発を試行するとともに、ジオ農林業の枠組みを活かした形として郷土料理についても調査・検討することとした。

持続可能な地域社会づくりを考えるワークショップを行うと、しばしば地域産品を活かした商品ブランディングや地産地消が解決策として挙げられる。しかし実際に地元産品で商品が開発できるについて、伊豆半島での鹿肉をテーマとしたケーススタディに取り組

んだ。その際、SDGsに関わる事としてフードマイレージやトレーサビリティなども意識した。なお、若い世代にとっての身近な食を考えた結果、コンビニエンスストアでも販売されている肉まんを取り上げた。

結果的に、鹿肉やしいたけは伊豆産のものが調達できるが、それ以外の小麦粉や調味料などは当然ながら輸入に頼る状況が明らかになった。これらの経緯をとりまとめ、地域特産品を使った商品開発でのフードマイレージの課題などを教材化する。

また、現在も郷土料理については調査を継続しているが、郷土料理のフードマイレージと上記を比較することで食に関する教材開発を行う。

4. 沼津商業高校が開発した「ジオパン」の諸支援

沼津商業高校は伊豆半島ジオパークの認知度の低さに課題意識を持ち、認知度を向上させることを目的としてジオパンを地元企業であるバンデロール社と協働開発した。静岡大学の本プロジェクトも活動する途上で沼津商業高校の存在を知り、途中からではあるが参画する機会を得た。

商品開発においては最終段階の検討会に参加し、各関係者と議論を行った。その後、横浜のアンテナショップでの試行販売において、沼津商業高校生によるジオパンの商品販売に対して支援を行った。

また、ジオパンの今後の展開可能性についても本メンバーで検討した。沼津商業高校は伊豆半島ジオパークでの経験を経て防災にも関心が広がったというコメントを受け、長崎県太田尾町に伝わる災害伝承の機能を持つ「念仏講まんじゅう」を参考に、保存食の機能を持つジオパンの開発を起案し、現在も検討中である。



写真1 横浜アンテナショップの販売支援

5. ジオパンをめぐる座談会 高校生×ガイド

沼津商業高校生はジオパンの販売を進める中で、商品のストーリー性を説明する点に課題を感じていた。そこで本プロジェクトの学生が主体となって、ストーリー性の問題を解決するため、伊豆半島ジオガイドとの座談会を企画提案した。

2018年1月24日、三島市の楽寿園前から白滝公園までの一帯に存在するジオサイトを活用し、高校生を対象とした大学生ジオツアーを実施した。続いて、三島市民文化会館ではジオガイドも交え、ジオパンのストーリー性を再検討する座談会を行った。

その結果、ジオパンには戸田の砂嘴の形と製塩業の歴史を、ジオメロンパンには溶岩塚とのアナロジーのストーリー性を付与することができた。今後は商品シールに記載するなどの可能性を検討している。



写真2 沼津商業高校生 × 伊豆半島ジオガイド座談会

6. これからの展望：消費者教育への落とし込み

以上を踏まえ、①地元産品による商品開発の困難さを考える教材、②ジオパンの防災面での展開、③ジオパンを事例としたジオパークの食×SDGsのモデルケースの開発、④郷土料理の持続可能性を考える消費者教育といった点を具体化する。また、2019年にはその成果の一部を活かし、学校での郷土教育を通じた教材開発や、免許状更新講習でも開講する予定である。

■本プロジェクト参加メンバー

山本 隆太 教職センター特任准教授

(プロジェクト代表者)

鈴木 渉太 人文社会学部法学科3年

岡部 由佳 地域創造学環2年

中山 理沙 地域創造学環2年

旧マッケンジー住宅の顕彰事業

井原 麗奈 | 地域創造学環准教授

連携先：公益財団法人静岡市文化振興財団

1. 事業の背景、連携先の課題

故ダンカン&エミリー・マッケンジー氏の旧宅である「旧マッケンジー住宅」は、1997年に国の登録有形文化財となり、現在は（公財）静岡市文化振興財団（所有は静岡市）が管理し、一般公開している。住人であった夫のダンカン氏は日本茶輸出の先駆者として静岡の茶業振興に一生を捧げ、夫人のエミリー氏も私財を投じて社会福祉に尽力し、静岡市の名誉市民第1号に選ばれた。いずれも静岡の近代史を語る上で欠かすことのできない重要な人物である。建物自体もW.M.ヴォーリズの設計によって1940年に建設され、建築的価値も高い。しかし、その文化的、歴史的価値づけ、意味づけが不十分であり、建物の活用方法については今後の課題となっている。



旧マッケンジー住宅

2. 事業の目的

私たちは「旧マッケンジー住宅」を地域の文化的リソースとして捉えている。新たな意味、価値付けをすることで市民のこの建物への理解と愛着が深まると考えるため、調査や講演会の開催などを行うものとする。

3. 事業の内容

当初、以下の内容を計画した。

- ①旧マッケンジー邸に保存されていた図面や写真などを整理しアーカイブ化する
- ②マッケンジー氏と親交のあった方からヒアリングを行う
- ③W.M.ヴォーリズの設計による別の建物を見学し、旧マッケンジー邸にどのような特徴と価値があるのかを見極める
- ④W.M.ヴォーリズの建築に対して見識の深い方による講演会を行う

①については連携先でほぼ作業が終了していたため、私たちは財団事務所で現物を見せていただいた上で、データを共有するのみとなった。また②については先方の体調不良により叶わなかったため、本事業は③と④が主となった。

（1）講演会「ヴォーリズ建築のあじわい方」

2019年2月24日（日）13：00～16：20

第一部：講演会

於：南部生涯学習センター第3集会室

講師：濱下昌宏氏（神戸女学院大学名誉教授）

第二部：旧マッケンジー住宅見学ツアー

於：現地

参加者：48名



催事のチラシ

講演は建築史的観点からではなく、濱下先生の専門分野である美学的な視点から行われた。先入観や偏見、予備知識から自由になる「無垢の眼」を持つこと、また歴史や記憶といった「人文的な知見を主体化」することによって風景や建物の味わいの豊かさ、深さを知ることができるという内容であった。またW.M.ヴォーリズの設計する建物の特徴として「環境との調和」があること、ヴォーリズ氏とマッケンジー夫妻、静岡との関係や、周囲の人間関係についても言及された。

また講演会でマッケンジー邸が海と富士山を愛でるのに適した設計であることが指摘されたが、現地見学会ではそれを確認することができた。

財団が行なったアンケート（回収率 68.8%）からは、参加者の 8 割が 50 ～ 80 代（男女比はほぼ同値）、参加動機も 8 割が「講演内容」であり、建物に対する興味以上に、建物の持つ意味・意義に触れたいという欲求があることがわかった。また回答者の半数が「これまで建物のことは知っていたが今回初めて訪問した」、「今回初めて建物の存在を知った」という人々であったことから、市民に対して興味を喚起する機会となったと言える。



講演会の様子①



講演会の様子②



現地見学会の様子①



現地見学会の様子②

（２）建築物の利活用状態の調査

ゼミでは現存するヴォーリズ氏の設計による建物を複数見比べることにより、利活用のあり方について学び、意見を述べあった。見学した建物は「①当初の目的どおりに使用されている建物」「②別な用途で使用されている建物」「③記念館になっている建物」の 3 つに分けられる（それぞれの状態を建物名の後に番号で示した）。

a. 静岡における調査

2019 年 2 月 23 日（土）静岡市葵区西草深

・旧静岡英和女学院宣教師館 ミス・カニンハム邸（②）

静岡市内に残るもう一つのヴォーリズ氏の設計による住宅である。ヴォーリズ氏が戦前に設計した英和女学院の校舎は戦災で失われたが、この建物は戦後に完成（1950 年）したため、現存する。「西草深の洋館を守る会」により個人宅として保存されているが、予約制のレストラン、民泊として一般の利用にも供されている。



ミス・カニンハム邸外観

b. 関西における調査

2019 年 3 月 25 日（月）滋賀県近江八幡市周辺

- ・近江八幡日牟禮ヴィレッジ（旧忠田邸）（②）
- ・ハイド記念館（ヴォーリズ学園）（②③）
- ・ヴォーリズ記念館（③外観のみ見学）
- ・旧八幡郵便局（③）
- ・アンドリュース記念館（旧近江八幡 YMCA 会館）（②③）
- ・近江八幡教会牧師館（旧近江兄弟社地塩寮）（②外観のみ見学）
- ・池田町洋館街（③外観のみ見学）
- ・旧豊郷小学校（③）

近江八幡市でのヒアリングによると、建物の保存の背景には教会や近江兄弟社の関係者・卒業生のネットワークが機能していることがわかった。NPO での保存、カフェや店舗としての利用事例も比較しながら見学することができた。この街の特徴は日牟禮八幡宮、

水郷、近江商人の町並みなど、ヴォーリス建築以外の観光資源も多い中で、それらの所在地が徒歩圏内に収まっている点にある。住人の愛着によって支えられていることも重要であるが、観光客が興味を持ちやすい環境が整っていることも理想的である。旧マッケンジー住宅を考えた場合、「登呂遺跡」「三保の松原」「久能山東照宮」「日本平」への観光周遊ルートに上手く組み込むような検討の余地もあろう。建物を取り巻く人間関係や物語をどのように紡ぐか、ということも課題である。



旧豊郷小学校玄関及び前庭



旧忠田邸外観 店舗利用の事例



旧忠田邸内観 店舗利用の事例



アンドリュース記念館 店舗利用の事例



旧八幡郵便局 NPO による保存事例

2019 年 3 月 26 日（火）兵庫県西宮市岡田山 / 上ヶ原
・神戸女学院大学（①）
・関西学院大学 聖和キャンパス / 上ヶ原キャンパス（①）



神戸女学院大学 中庭



神戸女学院大学 講堂（文学館の窓より）



関西学院大学 上ヶ原キャンパス 甲山を借景にした中芝

神戸女学院では窓からの眺めが、窓枠を額縁にした絵のように見え、ヴォーリス氏が旧マッケンジー住宅の階段ホールの窓も同じ趣旨で設置したのであることを確認した。

前日に見学した豊郷小学校の外観とも比較した上で計画的に整えられた庭や噴水を囲んだ学舎の前に立つことによって「自己の中心」が意識され、学びに対する精神の持ち方が変化することを実感した。建物の存在は内部に居る人の心性に影響を与えるだけでなく、外観が与える効果、風景を生み出す力を発揮していることがわかった。

また阪急沿線を訪ね歩くと、駅や劇場、高層マンションなどの公共建築に「スパニッシュ・コロニアル様式」が採用されていることがわかる。元は南欧の住宅デザインだったものが、アメリカ経由で日本に伝わり、阪神間の住宅や神戸女学院や関西学院で採用され、中流階級の象徴となった。景観に対する意識の高さを現しているものの、規模の大きな建物への採用は違和感すら与える。本事業の趣旨とは異なるが、まちづくりにおける景観を考える一助となった。

4. 事業を終えて

今回、所有者も管理形態も様々な築年数の長い複数の建物（殆どが戦前期に設置）を見学し、いずれの事例からも試行錯誤が感じられた。設置された当時とは変わってしまった価値観や所有者の置かれた経済状況。老朽化し、不動産としての価値も下がる一方の建物に、別な価値を付与するのは誰なのか。その責任についても考えさせられた。

事業終了後に参加学生に感想を寄せてもらったので以下に掲載する。

「建築物はどう扱うかによって雰囲気ガラッと変わってしまうこと、また、使い方によってはとても魅力的になることに気づきました。旧マッケンジー住宅にも、ヴォーリス氏の想いの詰まった家具があったことや、色々な人が出入りしたあったかい空間が広がっていたことを想像すると、今の状態はとても冷たく家としては死んでしまっている状態であると感じました。

ハコとして活用するのではなく、建築者の意図や空間を生かした活用の仕方が求められてくるのではないかなと思うので、展示より中身を充実させることのできる企画を立てるのが良いのではないかなと思いました。カフェや大学のような、生活の色や雰囲気がにじみ出るような使い方が魅力的でとても印象に残っています。」（大澤七彩 地域創造学環 3 年）

「様々な形態のヴォーリス建築を見学して、やはり

使われてこそその建物であり、使う人達の愛着や、建物とその思い出などを語れる人が居続けることが守っていかうで重要だなと思いました。旧マッケンジー住宅の写真も見返してみましたが、上手く活用出来ていないだけで、ちょっとした照明、ドアノブ、家具などモノとしての魅力は負けていないと思います。

旧マッケンジー住宅くらいの大きさの建物だと、神戸女学院のように毎日多くの人に使われる訳でもない、カフェや図書館、個展、コンサートなど、ある程度の時間をそこで過ごし、じっくり、ゆっくりと建物全体も味わえる、目がいくような使い方がいいのかなと思いました。結局財団の運営となると、資金やアイデア等の面でこういった事を実現するのは難しいのかなと思います。

管理者が民間よりだったらもっと大幅に変えられるのかもしれませんが、変えすぎて旧マッケンジー住宅の良さや空気感がなくなるリスクがあるのもこわいなとも感じました。」（鈴木夏帆 地域創造学環 3 年）

財団で保管されていたマッケンジー夫妻が居住していた当時の写真を見ると、丁寧にしつらえてある様子がわかる。クリスマスをテーマにした洋風の小物と和雑貨を程よく折衷させた、マッケンジー夫人の趣味の良さに学生たちも驚いていた。関西における調査だけでなくそれらの写真と現在の邸内の様子を見比べての感想と言えよう。

今回の事業を通じて建物の利活用については、管理者では判断できないことの多さを感じた。それはむしろ管理者ではなく所有者のポリシーに大きく関わっている。設計した人、そこに住んでいた人の想い、こだわりを汲み取れる感性が、いま旧マッケンジー住宅に対して責任を持たなければならない立場の人にあるのかどうか問われている。

旧マッケンジー住宅は現在耐震補強の工事のため、邸内の一部を閉鎖し、市の予算がおりるのを待っている状況である。工事には大きなお金が必要であり、それが承認されにくい事情はわからなくはない。一方で、現在の市政は施設の新設に予算を投入することには厭わないようである。新しいものには華があり、その魅力は誰にでも分かり易い。しかし古いものの中に価値を見いだすのは、知的に洗練された感性を持っているか否かにかかっている。そしてそれを獲得し得るのは教養を通じた教育でしかない。今回、この事業を通じて講演会の聴講者及び学生たちには、その機会を与えることが出来たと感じている。講演の中で講師の濱下

先生はヴォーリス氏の設計には「(建物の) 隅々に神々が宿る」、また「Everyday esthetics (=日常の美学)」という観念を大切にされた仕事があると指摘されており、学生達はそれを実感として抱いた。

また本事業で叶わなかったマッケンジー夫妻と親交のあった方へのヒアリングは、事業期間が終了した後でも、状況が許せば個別に調査を継続したいと考えている。

■本プロジェクト参加メンバー

井原 麗奈 地域創造学環准教授(プロジェクト代表者)
大澤 七彩 地域創造学環アート&マネジメントコース3年
鈴木 夏帆 地域創造学環アート&マネジメントコース3年
青木 良平 公益財団法人静岡市文化振興財団

発行日	平成31年3月
発行	国立大学法人静岡大学 地域創造教育センター
編集	堀川 歩美 静岡大学学務部教育連携室
連絡先	〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学地域創造教育センター ☎054-238-4056 E-mail kyouiku-renkei@adb.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト	http://www.lc.shizuoka.ac.jp/